

はじめに

国際学部では1994年（平成6）10月に創設され（学生受け入れは翌年4月）、その後のカリキュラムの見直しや大学院設置にむけての準備の時期である1997年（平成9）にはじめての評価書である「自己点検・評価報告書：現状と課題」を刊行しました。

「自己点検・評価」とは別に大学外部の方に委員をお願いし評価していただく「外部評価」を行い「外部評価書」を作成してきました。そのうちには2002年（平成14）に行ったAPSIA（The Association of Professional Schools of International Affairs 国際問題大学院連合）の会長も務められたルイス・W・グッドマン教授（ワシントンDCアメリカン大学）による外部評価も含まれます。なお、国際学部・国際学研究科は、そこでの評価によってAPSIA準加盟が認められました。

また、前回（平成19年度末）と前々回（平成17年度末）は国際学部卒業生および国際学研究科修了生の四名に外部評価委員をお願いし、外部評価報告書を作成いたしました。その際に平成20年度以降「同窓会・有識者懇談会」によって外部評価を行っていただくことも決められています。

今回は、その「同窓会・有識者懇談会」の外部評価に代わって、すこし異なった視点から外部評価委員をお願いしようと考えました。それは「外部評価について卒業生から意見をきくことは基本であるが、第三者による外部評価が必要である」（平成20年度期末監事監査）という指導にしたがったものです。

今回の外部評価の第一点は、2003年APSIA準加盟以来ある程度年月が経ちましたのでAPSIA加盟大学・学部の教員に委員をお願いしたことです。その二名の委員には特に国際学部・国際学研究科の教育カリキュラム、入試制度、学生指導体制等について評価をしていただきました。第二点は、学生を受け入れる側の企業やNPO/NGOからみて国際学部・国際学研究科の就職やインターンシップ及び教育内容、入試制度、学生指導体制等について評価していただくために、地元の経済界とNPO/NGOの方にそれぞれ一名ずつ委員をお願いいたしました。

こうしてこの報告書を作成することができました。委員の方々にはお忙しいところご協力本当にありがとうございました。

平成22年3月31日

国際学部長 岡田 三郎

目 次

1. 外部評価の方法	1
2. 外部評価の概要について	2
(1) 経緯	
(2) 外部評価の対象	
(3) 日程	
3. 外部評価書	
立命館大学 国際関係学部 教授 奥田宏司 氏	5
高麗大学 日語日文学科学科長 副教授 徐 承元 氏	10
社団法人栃木県経済同友会 筆頭代表幹事 板橋敏雄 氏	12
NPO 日本成人病予防協会栃木県健康管理士会会長 佐久間辰雄 氏	17
4. 資料編	
聞き取り調査	18
立命館大学 国際関係学部 教授 奥田宏司 氏	
聞き取り調査	26
高麗大学 日語日文学科学科長 副教授 徐 承元 氏	
聞き取り調査	33
社団法人栃木県経済同友会 筆頭代表幹事 板橋敏雄 氏	
NPO 日本成人病予防協会 栃木県健康管理士会会長 佐久間辰雄 氏	
5. 外部評価を受けて	53
後記	55

1. 外部評価の方法

外部評価委員

奥田 宏 司 委員 (立命館大学 国際関係学部 教授)

徐 承 元 委員 (高麗大学校 文科大学日語日文学科学科長 副教授)

板橋 敏 雄 委員 (社団法人栃木県経済同友会 筆頭代表幹事)

佐久間 辰 雄 委員 (NPO 日本成人病予防協会 栃木県健康管理士会 会長)

日 時

平成 22 年 2 月 4 日 (木) ～ 5 日 (金)

平成 22 年 2 月 18 日 (木) ～ 19 日 (金)

評価の対象

(1) 教育システム, 内容, 学生指導等について

- ・カリキュラムについて
- ・海外留学への派遣と留学生の受け入れについて
- ・入試制度について
- ・学生指導体制について
- ・カリキュラム, 学生指導体制, 入試制度に関する点検体制について

(2) 就職 (進路) の観点より企業・NPO・NGO 等から見た評価について

- ・海外志向の団体に所属して活躍する学生の育成について (特徴ある魅力)
- ・異文化コミュニケーション能力について
- ・交換留学制度を活用して世界からの留学生を増やすことについて

評価の方法

(1) 評価資料を外部評価委員へ事前送付し, 資料の検討を依頼。

(2) 外部評価委員が参集のうえで上述の評価対象について評価・提言。

(3) 外部評価委員と学部・研究科教員との質疑応答。

2. 外部評価の概要について

(1) 経緯

本外部評価は、第1期中期目標中期計画の最終年度に外部評価を行うという岡田三郎国際学部長の方針によって、国際学部・研究科点検評価委員会が招集され、同委員会の計画の下に実施されたものである。

国際学部・国際学研究科は平成6年10月の学部創設以来、平成11年、平成14年、平成17年、平成19年の4回外部評価を行って来た。しかし平成21年の監事監査において、平成17年度と19年度の外部評価は国際学研究科の修了者によって行われており、国際学部及び国際学研究科と関係のない有識者たちによる外部評価も必要との指摘を受けた。そのため国際学部・研究科点検評価委員会は、平成21年の第1回会議で、岡田学部長から、国際学研究科が准会員として加盟している APSIA（国際問題大学院連合）関連の大学、および経済界と市民団体から外部評価委員を選任するようにとの指示を受け、立命館大学国際関係学部、高麗大学日語日文学科、栃木県経済同友会、宇都宮市市民サポートセンターに、外部評価委員の推薦を依頼することとした。その結果各大学・団体から、立命館大学国際関係学部教授奥田宏司氏、韓国高麗大学日語日文学科学科長・副教授徐承元氏、栃木県経済同会筆頭代表監事板橋敏雄氏、栃木県健康管理士会会長佐久間辰雄氏の推薦を受け、4氏に外部評価委員を依頼し承諾いただいた。

(2) 外部評価の対象

外部評価の対照については、奥田宏司氏と徐承元氏には以下の項目について依頼した。

- ・国際学部および国際学研究科のカリキュラム
- ・国際学部および国際学研究科の教育体制
- ・国際学部および国際学研究科の学生指導体制
- ・国際学部および国際学研究科の入試方法

また板橋敏雄氏と佐久間辰雄氏には以下の項目について依頼した。

- ・学生を受け入れる側から見た国際学部および国際学研究科の教育内容
- ・学生を受け入れる側から見た国際学部および国際学研究科の教育体制
- ・学生を受け入れる側から見た国際学部および国際学研究科の学生指導体制
- ・学生を受け入れる側から見た国際学部および国際学研究科のキャリア教育
- ・学生を受け入れる側から見た国際学部および国際学研究科の進路実績

以上の評価のために各氏に外部評価を委嘱する際に以下の資料を送付した。

- ・宇都宮大学概要 平成 20 年度版
- ・宇都宮大学学則
- ・宇都宮大学国際学部履修規程
- ・宇都宮大学案内
- ・宇都宮大学学生選抜要項
- ・宇都宮大学シラバス（国際学部編）
- ・宇都宮大学学生生活案内
- ・宇都宮大学国際学部卒業論文題目一覧
- ・宇都宮大学大学院国際学研究科修士論文題目一覧
- ・宇都宮大学大学院国際学研究科案内
- ・宇都宮大学国際学部パンフ
- ・宇都宮大学国際学部履修案内
- ・宇都宮大学国際学部履修ガイド
- ・宇都宮大学中期目標中期計画

この資料の調査に基づいて、4 氏に訪問調査を依頼し、それぞれに疑問点や不明点について聞き取り調査を行ってもらうと同時に、施設設備の視察も行っていただいた上で、外部評価の結果を書面で提出頂いた。

(3) 日程

学部・研究科点検評価委員会の開催は次のとおりであった。

第 1 回 平成 21 年 10 月 13 日（火） 16：15～17：10 於第 2 会議室

議題 1 外部評価について---依頼団体の決定

2 日程---訪問調査と評価書提出の日程の決定

第 2 回 平成 21 年 10 月 26 日（月） 16：15～16：45 於第 2 会議室

議題 1 外部評価委員について---外部評価委員依頼者の決定

2 送付資料について---送付資料の決定

第 3 回 平成 21 年 11 月 10 日（火） 16：15～17：05 於第 2 会議室

議題 1 外部評価委員について---残りの外部評価委員依頼者の決定

委嘱は以下のように行った。

板橋敏雄氏には、平成 21 年 11 月 17 日に、岡田三郎学部長と友松篤信評議員が足利市の板通本社を訪れ外部評価の概要を説明し、承諾を頂いた上で、平成 21 年 12

月 21 日に委嘱状と資料を送付した。

また、奥田宏司氏、徐承元氏、佐久間辰雄氏にも平成 21 年 12 月 21 日に委嘱状と資料を送付した。

訪問調査に関しては、以下の通りである。

奥田宏司氏は、平成 22 年 2 月 4 日（木）に国際学部を訪問され、15：00 より第 2 会議室にて聞き取り調査を行った。この聞き取り調査に国際学部・国際学研究科から出席したのは、岡田三郎学部長、友松篤信評議員、重田康博国際社会学科長、佐々木一隆国際文化学科長、高際澄雄学部・研究科点検評価委員長、品川昇事務長である。平成 22 年 2 月 5 日（金）9：00 からは施設設備の視察が行われた。

徐承元氏は、平成 22 年 2 月 18 日（木）に国際学部を訪問され、15：00 より学部長室にて聞き取り調査を行った。国際学部・国際学研究科から出席したのは、岡田三郎学部長、友松篤信評議員、重田康博国際社会学科長、佐々木一隆国際文化学科長、高際澄雄学部・研究科点検評価委員長、倪永茂同委員、品川昇事務長である。

訪問調査に先立ち、佐久間辰雄氏が平成 21 年 1 月 22 日（金）に友松評議員を研究室に訪れ、外部評価の方法について質問をし、友松評議員が回答している。また平成 22 年 2 月 13 日（土）に友松評議員が板橋敏雄氏と東日本ホテルで面会し、板橋氏の質問に回答している。その上で、平成 21 年 2 月 19 日（金）に板橋敏雄氏と佐久間辰雄氏が国際学部を訪問され、午前 10 時から国際学部長室で聞き取り調査を行った。国際学部・国際学研究科から出席したのは、岡田三郎学部長、友松篤信評議員、重田康博国際社会学科長、佐々木一隆国際文化学科長、高際澄雄学部・研究科点検評価委員長、品川昇事務長である。

平成 22 年 5 月までに 4 氏の外部評価結果が書面で提出され、その公表については、すでに新しい国際学部・研究科点検評価委員会が発足していたが、前年度の事業であるということから、学部長とともに平成 21 年度の点検評価委員が外部評価報告書の公表までを担当することとなった。その会議は以下の日程で行われた。

- 第 1 回会議 平成 22 年 6 月 9 日（水）午後 5 時 30 分より 6 時 30 分
- 第 2 回会議 平成 22 年 6 月 24 日（木）午後 2 時 30 分より 4 時 00 分
- 第 3 回会議 平成 22 年 7 月 8 日（木）午後 6 時 00 分より 7 時 00 分
- 第 4 回会議 平成 22 年 7 月 20 日（火）午後 4 時 00 分より 5 時 30 分

宇都宮大学国際学部への「評価書」

立命館大学 国際関係学部
教授 奥田 宏司

はじめに

評価者は、宇都宮大学・国際学部から郵送されてきた諸資料を検討するとともに、2010年2月4、5日には宇都宮大学・国際学部を訪れた。この両日には岡田三郎・学部長、高際澄雄・教授をはじめ6名の教員、事務長から詳しい説明を受けるとともに、諸施設の状況検分をおこなった。以下は、諸資料と訪問をもとに行なった「評価書」である。

1、学科制とカリキュラム

(1) 学生定員と教員数

国際学部の学生定員は100名(学科ごと50名)、他方、教員が40名前後であり、教員の数に比べて学生定員が少なく、教員と学生が名前を相互に知りうる環境の下に大学教育が進められている。演習(ゼミ)における学生の数も、多いクラスで10名前後であり、クラス数が少ないゼミでは2~3名とのことで、丁寧な指導が行なわれているという印象をもった。卒業論文が必修科目になっていることは意義が大きいであろう。

また、各教員の研究室から廊下を挟んだ場所にそれぞれの演習室が設置されており、学生はいつでもほぼ自由に利用できる点など、施設面でも私立大学と比べて恵まれた環境にあると考えられる。

しかし、学生定員が100名にとどまっていることから生じている諸問題も予想されるところである。ゼミなど各クラスの人数が少なく、学生どおしのチームワークが作りにくいのではないだろうか。ゼミにおいて教員と個々の学生との「交流」が中心となり、学生相互の「交流」は進んでいるであろうか。学生は、教員による指導ばかりでなく学生相互の切磋琢磨によって育つ面があるからである。

以上の状況を補完する措置として、高学年と低学年の「学生交流」、高学年の学生の低学年の学生への「援助」などを学部教授会の方針として保持されてはどうか。

また、学生定員の若干の増員も検討されてはどうか。教員数が約40名であるから、40~50名の増員があっても教育上の問題はほとんど生じないと思われる。もちろん、学生定員の増加には学部内での十分な論議が必要であり、また、文科省への働きかけの「困難性」が伴うことはあろう。しかし、その努力を行なっていただきたい。

(2) 「国際学」について

学部概要などの資料によると、「国際学部」の理念と「国際学」について、以下のよう
に記されている。「国際学部は・・・伝統的な学問の枠組みを越え、諸科学の連携
による新しい学問体系『国際学』(International Studies)の基礎的・専門的知識を
身に付け、地域社会及び国際社会に貢献することのできる人材を養成します。」

ここには、21世紀の新しい学問への「未来性」が謳われており、新鮮な印象を受
験生、学生諸君に与えているものと思われる。そのことによって、国際学部は栃木県
や関東地方、南・東北地方だけでなく、全国から入学者を確保していると考えられる。

しかし、「国際学」という学問は発展途上の「学問」であり、高度化のために普通の努
力が求められる。評価者の勤務学部(立命館大学・国際関係学部)においてもこの点に
おいては、国際学部と共通課題をもっている。「国際関係学とは何か」ということにつ
いて、学部発足以来何回かの検討を行なってきた。しかし、現時点において受験生、
学生諸君に提示している内容が十分なものとは思っていない。いくつかのディシプリ
ンを統合した1つの学問体系はまだ作りえていないと思われる。

(3) 2つの学科について

宇都宮大学・国際学部は国際社会学科と国際文化学科の2学科制となっている。2
つの学科でありながら「学部基礎科目」が置かれて、相互の交流を図るカリキュラム
も考えられている。また、他の学科の授業科目もかなり取得でき、さらに、他学科の
ゼミにも参加できるとのことで、学科の「分立」状態はないと思われる。

「学部基礎科目」の上に「学科基礎科目」が、さらに、その上に「学科専門科目」が置
かれて、2つの学科の全体のカリキュラムが作り上げられている。このようなカリキ
ュラム体系は大筋において納得のいくものである。

問題は「国際社会」と「国際文化」という2つの区切りの如何である。「国際社会」
の中には社系の分野がすべて含まれており、また、「国際文化」の中に多様な人文系科
目が配列されている。さらに、各学科の選択科目の中に「地域科目」が区別されないで
入れられている。以上のように、各学科の科目を見る限りでは、乱雑な履修も可能な
状態にあると考えられる。評価者の訪問の際にこの点を質したが、追加資料として「履
修ガイド」が提出され、「履修モデル」が学生諸君に提示されていることがわかった。

ただし、ここで示されている「履修モデル」はAの1~8、Bの1~5、Cの1~9と
20を越え、細分されすぎのように思われる。学生定員が2つの学科で100名である
から、6~8のモデルに集約させることが必要であろう。その集約の際、ディシプリ
ンへの配慮とともに、「テーマ性」についても検討されたい。学生は初めて「国際学」を
履修するのであり、国際学部に入ってくるのは、ディシプリンよりも国際社会での
諸問題(テーマ)に関心を抱いているからである。それぞれのテーマに接近していく過
程で、学生諸君はディシプリンが重要なのを自覚していくものと考えられる。

また、地域科目をどのように位置づけるかということも、検討が必要なのではない
だろうか。テーマ、ディシプリン、地域の3者の連関性である。次のような考え方も
あろう。それは、ある地域を集中して履修することである。例えば、アジア地域を、
政治、経済、社会、文化の全分野にわたって学習するための履修モデルがあってもよ

い。

2つの学科制をとることが、入試においても弾力的な運用に支障になっていないか検討されることも必要ではないだろうか(後述)。

(4) 大学院

前期課程の定員は30名である(3つの専攻)。学部定員が100であるから、相対的に大きな規模である。それだけ、定員充足には苦勞が伴うであろう。国際学部からの進学にとどまらず、他大学からの進学を確保するための諸方策が検討されなければならないだろう。訪問時には質問できなかったが、学部からの「早期卒業制度」、「飛び級」の導入、他大学からはAO入試などが考えられる。

後期課程については、その中心が研究者養成になっていないことは理解できる。研究者養成になっていなくとも、学部から大学院後期課程までの一貫した教育システムをもつことは、学部教育にとっても様々なプラスになるだろうし、教員にとっても刺激となろう。

(5) 入試制度

学部定員が100名であることから、多様な入試制度を設けることには限界があろう。1つ1つの入試方法に限定された定員(例えば10名)を設定すると、受験生は敬遠することがあるからである。しかし、国際学部という学部の性格上、多様な学生を確保していくことが、学部の発展のためには不可欠である。

現在、国際学部は2つの学科制を取っており、それぞれに50名の定員が定まっている。入試判定もそれぞれに行なわなければならない。年度によっては2つの学科で合格基準が異なることもあろう。そのことがより弾力的な入試制度の導入に支障になっていないだろうか。先に述べたように、カリキュラム上も学科の違いによってそれほど大差がないようであり、学生にとって2つの学科の区分がなくても不利にはならないと思われる。ゆるやかなコース制の導入でもよくはないだろうか。

評価者の所属する学部においては最初から1学部・1学科制であり、これまで一度、コース制から2つないし3つの学科制への移行の議論もあったが、「国際関係学」という分野の性格上、学科制を採用するといろいろな面で弾力性を失うということで、今日まで来ている。

学科制の廃止には様々な検討と学部内での十分な合意が必要と思われるが、タイプの異なる学生を今後も国際学部に引きつけるために一度は検討されてはどうだろうか。

2、海外留学への派遣と留学生の受け入れ

日本人学生の海外への送り出しと留学生の受け入れという課題は、国際系の学部にとって重い課題でありながら、この2つの課題を達成していかないとその存在意義を問われることになる。迅速、慎重に議論されることが必要であろう。

(1) 海外留学

宇都宮大学全体の海外の大学との協定は 28、国際学部独自の協定大学は 12 とのこと、まずまずの実績があるものと思われる。評価者は、訪問時に「英語圏への派遣の場合、TOEFL の基準が求められるが、基準達成のための語学力アップの方策が採られているか」との質問を行なった。多くの学生を英語圏の大学へ派遣できる語学力アップの方策は十分なものではないという回答であった。

日本の高校からの入学の場合、TOEFL において 550 を超える学生は皆無に近い。このことは、宇都宮大学・国際学部だけの問題だけでなく、全国の国際系の学部が抱えている共通の問題である。中国、韓国などのアジアの学生の英語圏への留学が急速に進んできている今日、日本の学生を多く派遣することも求められていよう。今後、この課題は多くの大学において避けて通れないものである。当学部でも場合によっては、正規科目外においてではあっても、TOEFL アップの対策を検討しなければならないと思われる。

(2) 留学生の受け入れ

資料によると、短期の受け入れなども含めて今年度、学部において 28 名、大学院において 43 名という。国際学部の受け入れは日本語ができる留学生が基本ということであった。しかし、今後、多くの留学生を受け入れる場合は、「日本語基準」だけでなく「英語基準」で受け入れることも検討される必要があるだろう。アジア各国からだけでなく、広く全世界から留学生を受け入れようとする場合、日本語ができるという基準では限界があるだろう。

英語の基準で留学生を受け入れること、その上で日本語教育のカリキュラムを充実させること、英語での授業科目の設置も考えられなければならないだろう。卒業の単位がすべて英語科目ではなく、その半分ぐらい、とりわけ、日本語が習得できるまでの低学年では英語科目が重きをなすカリキュラムである。その場合、外国人教員を任期制で採用することも検討がはじめられる必要があるだろう。

さらに、留学生は最初の 1 年は寮での生活が多いと思われるが、さらに、より長期、寮で生活できるように寮を充実させることも検討されなければならないだろう。

3、その他

(1) インターンシップなど

国際学という学問の性格上、インターンシップも重要なシステムである。とくに、国際協力・開発に関心をもっている学生諸君にとっては、とくにそうである。08 年度の「インターンシップ報告書」を見ると、7 名の学生諸君がインターンシップに参加している。うち、3 名が海外の施設でインターンシップを経験している。

今後、これまで以上に国内の援助機関、NPO、さらには海外の援助機関へインターンシップとして送り出す大学側の機構を充実させることが必要になってこよう。

(2) 国内の全国の同系・学部のあいだの連携

国際学部、国際関係学部などの全国の同系学部は、発展途上の学部であり、カリキュラム、海外留学の派遣、留学生の受け入れなど、教育の種々の面で経験交流を行な

う必要があるものと思われる。国立大学としての宇都宮大学は、そうした全国の学部間の交流のリーダーシップを取りうるものと思われる。そのことを検討されることも願っている。

宇都宮大学国際学部への「評価書」

高麗大学 日語日文学科学科長
副教授 徐 承元

総括

国際学部の設置理念である国際学の構築、相互理解と共生、グローバル化への対応等に関わる諸問題の教育研究、そして大学院国際学研究科の設置理念である国家間対立等に関わる諸課題、異文化理解と多文化共生、市民レベルの国際交流・国際貢献に関わる諸課題の研究は、ともに国内外の変化を先取りしたものであり、学部および大学院のそれぞれの構成（学部における国際社会学科および国際文化学科、ならびに大学院における国際社会研究専攻、国際文化研究専攻、国際交流研究専攻）も教育の内容を大変充実反映したものとなっているものと思われる。国立大学法人の第一期中期目標中期計画に照らし、全体的に期待される水準を上回っていると判断する次第である。

1. 国際学のカリキュラムについて

国際学部のカリキュラムは、学部基礎科目（基礎科目、専門外国語科目、情報科目）および両学科の授業科目（学科基礎科目、選択科目、演習及び実験・実習科目、卒業研究準備演習・卒業研究）とあり、大変バランスの良く、かつ豊かな諸科目が収まっている。なお、大学院国際学研究科においても、国際学基盤研究、国際学基礎演習・国際学リサーチ演習・国際学臨地研究および特別研究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲは、同研究科の目指す高度専門職業人の養成に最も適したカリキュラムになっているものと思われる。特に、在学生当たり教員数、学際的・総合的なアプローチの視点を強調する科目の配置などは特に評価すべきものがある。

以上からすると、国際学部および国際学研究科のカリキュラムは、期待される水準を上回っており、改善すべき点は特に見当たらなかった。ただ、国際学部、国際学研究科を包括する理念である「多文化公共圏」の下位理念として「国際学の構築」があげられているが、それが目指す学問的な方向性をより明確に提示すればさらに分かりやすいと思われる。なお、専門外国語科目の場合は、10単位が必須とされる。一カ国語が最大6単位（3科目）となっていることからすると、これで十分な外国語能力の向上につながるかどうか少し疑問が残る。ちなみに、学部基礎科目に「朝鮮語」がのっているが、入学者選抜要綱では「韓国語」と書いてある。

2. 国際学部の入試制度について

国際学部の入試実績（平成20年度志願倍率3.8）および国際学研究科（平成21年度1.93倍）は、ともにすぐれたものである。ただ、大学院国際文化研究専攻の入学人数が募集定員を下回っているのはやや気掛かりである。専門科目の筆記試験は、他学部出身者にとって、障壁になっているかもしれない。

3. 学生指導体制について

国際学の教育において最もすぐれているのが、有機的かつ体系的な学生指導体制ではないかと思われる。まず、学部における教員と学生が一緒につくる参加型授業科目の設置は、学生たちの自主的学習態度の涵養はもちろんのこと、教員の学生指導への大きなインセンティブを与えているものと考えられる。大学院における複数指導体制、インターンシップ、フィールドワーク、ジョイント型セミナーも研究の充実化に大いに寄与していると思われる。学部・大学院体制の有機的な構成も評価に値するものであろう。派遣留学生数も着実に増加しており、学部の設置理念が学生たちの間に着実に浸透している様子が見て取れる。その結果は、学生たちの授業への高い満足度、そして実に驚くべき高い就職・進学率（平成19年度の95%）という大変素晴らしい実績につながっている。学部卒業者の進路状況からすると、キャリア意識の啓発もさることながら、マクロ面でみると、国際学部の設置とその運営はかなり成功的なものであったことがわかる。国際学研究科博士前期課程の進路状況も同様に素晴らしいものがある。

4. カリキュラム、学生指導体制、入試制度に関する点検体制について

国際学部の教育内容・教育方法の改善に向けて取り組む体制（FD研究会の活動）、教育内容・方法改善のための実施体制、大学院国際学研究科の教育方法の改善に向けて取り組む体制、学生や社会からの要請への対応、授業形態の組み合わせと学習指導法の工夫、主体的な学習を促す取組、学生が身に付けた学力や資質・能力、学業の成果に関する学生の評価、関係者からの評価など、実に万全を期した体制となっていることがわかる。平素より様々な社会的ニーズに対し、積極的かつ的確に対応するよう工夫していることが一目でわかるばかりか、更に言えばまさに他校のモデルになれるような点検体制が築き上げられているのではないかと思われる。ちなみに、学部・大学院の意思決定システムは、学部長・研究科長、2学科長、大学院3専攻主任、研究科長補佐の体制となっている。学科長と専攻主任との横のコミュニケーションは運営会議によって行われていることが聞き取り調査から、明らかになった。

宇都宮大学国際学部への「評価書」

社団法人栃木県経済同友会
筆頭代表幹事 板橋 敏雄

課題 1. 「学生特に留学生の入学試験はどの様に成っているか。多様な留学生を受け入れる試験制度に成っているか」

- ・ 日本留学生試験を受ける。日本語、理系、文系の三つの科目を選んで受ける。
- ・ 宇都宮大学の試験、先ず語学、母国語で受けてはいけない条件故、殆どの学生が日本語を選ぶ。
- ・ 小論文は、日本語で授業が行われる関係から、日本語でちゃんとした論文が書けるかどうかを見る。
- ・ 面接では、日本語がきちんと使えるかどうか、と 4 年間をこの大学できちんと過ごせるかどうかを見る。

この様な試験方法で行っているが、最近の傾向として、台湾、韓国が減少してきて、その分中国が増えてきている。大学としては、ベトナムやインドネシア、マレーシア、フィリピンからも来てほしいと思っているが、やはり漢字が障害になっている感じがするという。

私としては、宇都宮大学は、創立後 15 年と言う若い国際学部なので、何とか工夫をして、東南アジアからの学生を依り多くの国々から入れるように努力して欲しいと思う。理想は、本校の国際学部で、アジアの強力な連帯が生まれるように希望したい。

課題 2. 「交換留学制度を活用して、世界からの留学生を増やす事が出来ないか」

政府が力を入れて、30 万人の留学生受け入れに向かっているのは、結構な事だが、政府ももっと資金を用意する必要があるのではないかと思う。高麗大学(韓国)では、留学生の授業料を 7 割減免している例を上げて説明を受けたが、全く韓国の政府の政策は熱意溢れるものだと聞いている。韓国の企業が世界で大変に伸びているのもこの様な迎え入れた留学生に政府が多額の援助をしているからだと言っている。高麗大学では、留学生の授業料を 7 割減免しているとの事。韓国に来た留学生に良い学問を授けて、韓国のファンになってもらう事は、現在の韓国の発展を支えている

のではないか。留学生の中には、アルバイトをしなければやって行けない人も多いと言う。そのアルバイトも減少してきて、学費の滞納者が増えていると言う。日本もこの問題を何とか解決してゆかねばならないと思う。

課題 3. 「(財) ロータリー米山記念奨学会の奨学事業について」

私は、現在同財団の理事長をしている。日本全国 34 地区、92、500 人のロータリアンから、毎年 14 億 5 千万円の寄付を募り、日本の全国の大学に留学しているアジアを中心にした 800 名の大学生・大学院生に返済義務の無い奨学金を支給している。大学生に 10 万円、大学院生に 14 万円を全国各地の世話クラブに於いて、毎月そのクラブ会長から支給している。日本最大の民間奨学財団である。

勿論、当宇都宮大学よりも毎年 10 名位の留学生をお世話している。当財団は、1967 年設立以来、14,300 人の留学生をお世話しており、その中から 3,125 人の博士号取得者を生み出している。14,300 人の出身国は、中国が 27.4%、韓国 25.3%、台湾 22.1%その他のアジア州 10.7%にマレーシア、ベトナムが続いている。全国各地の大学から推薦を受けて、各地区の米山記念奨学金委員会が選考に当たり、優秀な学生を選んでいる。尚、この奨学会の特徴は、各クラブにはカウンセラーが選考され、期間中奨学生の面倒を見る。即ちクラブ総がかりで奨学生を育てて居るのだ。従って、日本全国に学友会（現役奨学生と元米山所学生）が 30 あり、海外には台湾、韓国、中国に各 1 合計 33 の学友会が組織され、熱心に活動している。母国に帰ってからも、学友は大変に活躍しており、現在第 18 代大韓民国駐日親善大使の権 哲賢氏は、25 年前に栃木県佐野東クラブにホストされて、筑波大学に 2 年間奨学生であった。また台湾からの奨学生であった徐 重仁氏は、セブンイレブン、スターバックス、クロネコ大和の総代理店を務める台湾最大の流通・小売業の統一超商のオーナーである。この様に各国で活躍している学友を日本のロータリークラブが育てていることを誇りに思っている。

その実りが、具体化されている事をお伝えしたいと思う。宇都宮大学国際学部にも相互理解によって世界の平和への貢献が期待されているから。

先ずその一つは、既に結成されて 20 年になる台湾学友会は、毎年 12 月に総会を開催し、台湾全土から 200 名の学友が集合して台北で盛大に各支部の成果が発表される。その学友会が今年からの新規プログラムとして、彼らの寄付金により日本から台湾へ留学したい学生を募集して、彼らが選考して決める事になり、一人の女子学生が台北の国際大学へ留学中である。

二つ目の慶事は、昨年 3 月に中国に於いて、念願の学友会が誕生した事です。共産党一党独裁の国ですから、その成否が心配されましたが、それは杞憂に過ぎませんでした。1995 年から 97 年まで東京大学大学院に留学中米山奨学生であった姫軍（ジ・ジュン）さんが北京に帰って法律事務所を立ち上げ、大成功されました。

彼は事務所を総動員して、中国全土の米山学友にメールで呼びかけた結果 98 人が北京に集まりました。理事長の私と副理事長、事務局長それに駐中国日本大使の 4 人が日本人でした。昼食を挟んで発会式は、4 時間くらい掛かりましたが、彼等は全部日本語で進めました。これには先ず感激しましたが、それよりも感動的な姫軍会長の挨拶でした。彼はこう述べました。第 1 に、私達は、米山奨学会への感謝の気持ちで結ばれている。第 2 には、どの様にそのご恩返しをしようかという気持ちです。中国には、「たとえ一滴の水でも受けた恩義は湧き水として報いるべき」という諺があります。我々は、今皆の力を合わせて湧き出る水の様にして、中国人の次の世代に日本を本当に理解させる運動を起こして行こう。それが日本に対する恩返しだと言われたのです。

この様に感動的な中国の学友会第 2 回目は今年 7 月上海で開催されます。私は米山奨学会理事長として、全国のロータリー地区に呼びかけて、一人でも多くの世話クラブのロータリアンに参加されるようにお願いしましたところ、230 人の申込みを受けました。この会を通じて更に日本と中国の絆が強まる事を期待しています。宇都宮大学からの奨学生が毎年栃木県に於いては最大のグループになっています。殆どが国際学部の在學生ですので、本学部の益々の進展を希望する次第です。

課題 4. 「海外志向の団体に所属して活躍する学生の動向は宇都宮大学国際学部の特徴ある魅力として育成されたい」

- ・ 青年海外協力隊へは毎年ほぼ 1 名採用されているとの事、喜ばしい事である。
- ・ 日本全国組織の模擬国連という団体の国際大会に毎年日本代表として本学部から派遣している事も、素晴らしい。
- ・ リソース・ネットワークという団体は宇都宮大学の学生が自分達で立ち上げた。フェアトレードと言って、公正な貿易、第三の貿易とって、現地の人に配慮した公益によって途上国の支援をしようという団体。この様な考え方を出来るだけ支援をして行きたいと思う。

この様な場所と機会を作って居られる事は、大いに評価したいと思います。彼等は社会に出てから必ずチャンスを求めて海外に出て行って、国際貢献の道を選ぶと思いますから。日本の今後の経済の発展を考えても、東アジアの諸国を対象に、日本が今まで培った知識や経験、また素晴らしい技術を携えて、出て行って貢献する事が、日本の生き残る道ではないかと思えるからです。

課題 5. 「インターンシップ制度の重要性について」

貴学部は、発足語 15 年に成りますが、発足後 3 年目にして早くもこのインターンシップ制度を立ち上げられました。私も栃木県職業教育審議会の委員長を拝命していた時に、栃木県立の職業高校のインターンシップを協力を提案いたしまして、数年前に栃木県全職業高校に於いて採用さえるようになりましたが、これは、栃木県に生まれ、教育を受け、職業について生涯を送る学生にとって、自分の性格に合致した職業を得る事は大変に重要である事が本人にとっても事業者にとっても効果のある事が実証されました。

友松教授のご提案に依り発足したものと伺いましたが、学生にインターンシップ先を自分で探させ、交渉させて、先方の内諾が得られたら、学部長名で依頼状を出して、スタートする制度です。また、開始前に学生にビジネスマナーやその意義を十分に学生に説明する事前指導を行っています。そしてインターンシップ終了後に報告書を提出させ単位を認定する制度になっています。また、インターンシップ先を限定せず、学生の希望により企業、自治体、市民団体、NGO,NPO を選ぶ事が出来るようになっていきます。また、大学のホームページに学生の報告書を掲載して居られます。学生は、国内ばかりでなく海外のインターンシップ先も見つけてきます。その様な特徴を踏まえて、来年度から国内インターンシップを一つの科目、国外のものをもう一つの科目として設ける事になっている事は「国際キャリア実習」の効果を大きく前進させる事に期待が寄せられます。貴学部の特徴として大いにマスコミにも宣伝する価値がある事と評価いたします。

課題 6. 「異文化コミュニケーション能力に就いて」

現代の様に異国間の政治経済における交流がスピードと質量共に盛んに成って来ると、このコミュニケーション能力を大学に於いてどれだけ育成出来ているかが大きな評価の対象になってくると思う。

私の関係する米山記念奨学会に於いても、難しいと思われていた中国に米山学友会が誕生し、また奨学金を受領した学友が日本企業に就職し、その人達が日本に於いてロータリークラブを作り、社会奉仕や国際奉仕に尽す等、従来にない躍動が起こっているのも、異文化コミュニケーション能力によるものと思われる。本校に於いては、交換留学で提携校に滞在して帰国してから、毎年 2 度くらい集まって、本校に留学中の学生に個別に指導する機会を設けており、またチューターの制度が用意されているのは大変結構な事だと思う。

また常時交流ルームを設けて、多国籍の留学生に日本の学生も一緒になって、コミュニケーションを促進している事は、評価できると思う。

これと同時に、英文学理解の観点のほかに、海外との高度なコミュニケーションに不可欠な英語力養成の観点から、TOEIC や TOEFL への挑戦は奨励しているの

かと言う質問に対しては、TOEICについては、1年生から受験が義務付けられたとの事で結構な事と思う。またインテンシブ・トレーニング・キャンプを更に充実しようと言う計画があり、これの徹底を御願いしたいと思う。

結語 宇都宮大学に於いては、国際学部が出来て15年の歴史を積み重ねてきました。私が思いますのに、この10年、20年と言うデケイドに於いて、特にインターネットの発達により、世界は、文化・経済を始め全ての面に於いてより近く極めて即時反応の関係が求められる時代となった。この様な多面的なしかも重層的な変化に対応して行くためには、50年、100年と言う歴史のある大学の国際感覚には、伝統と言う厚い壁の為に難渋する事が考えられる。その点、宇都宮大学には、新しい躍動的な変化に積極的に挑戦する意欲が感じられる。教授陣関係各位の先見性と弛まざるご努力により、貴学部の進展を心より祈念するものであります。

宇都宮大学国際学部への「評価書」

NPO 日本成人病予防協会

栃木県健康管理士会会長 佐久間 辰雄

1. 国際学部のインターンシップ制度は評価できる。NPO は専門的な団体が多く、NPO に加わるにはキャリア、経験が重視される。県内の企業が積極的に学生インターンを受け入れているのは、NPO 側から見てもありがたい。
2. 国際学部が教育の中でソーシャルビジネスへの関心を育んでいることは、評価できる。ただし、ソーシャルビジネスに期待して入っても、ビジネスが失敗する危険性はもちろんある。
3. 日本語教育は海外でのニーズがある。中国は地域によって日本語教育のニーズは異なるが、大連などでは需要が大きい。中国人研修生を日本に送る中国の派遣会社では、日本語教育への需要が満たされていない。
4. NPO の専門分野は多様である。例えば、食料、環境、健康などの分野があり、栃木県には社会的弱者を支援する人権関連の団体が多い。国際学部のパンフレットをみると、国際学部にも多様な専門分野があり、「国際学部は NPO みたい」と感じる。
5. 国際学部は、未来に対する強い興味と関心を育てている。国際学部には、国際社会の未来をイメージし、その方向に向かっていく未来志向がある。先人の業績を知れば、未来志向は自然に生まれる。
6. 国際学部で学生のボランティア活動が活発であることは、多いに評価できる。仕事と人生は違うと考えるところに、ボランティアがある。ボランティアは夢をもち、その夢に向かって進むことである。学生 NGO「リソースネットワーク」の活動は、テレビで放映されていた。

立命館大学 奥田宏司教授による聞き取り調査（要旨）

平成 22 年 2 月 4 日（木）14 時～

出席者：奥田宏司 氏（立命館大学国際関係学部教授），
岡田三郎学部長，友松篤信評議員，高際澄雄点検評価委員長，
重田康博国際社会学科長，佐々木一隆国際文化学科長，品川昇事務長

委員の紹介のあと、聞き取り調査が行われた。

岡田 1 年おきに外部評価を行っているが、今回、奥田先生の他に、韓国高麗大学の徐承元先生、栃木県経済同友会筆頭代表監事板橋敏雄氏、栃木県健康管理士会会長佐久間辰雄氏に外部評価委員をお願いしています。それでは、国際学部のパンフレットを使って、説明してください。

高際 国際学部を設立するとき、その学問の特徴を議論して、国際的な問題を扱う際に、学際的・総合的な手法を使って、教育・研究を行っていくことだとしました。学科は、国際社会学科と国際文化学科の 2 学科としました。そのミッションとしては、国際学の構築、国際問題の具体的な解決をめざす研究とその解決に関与できる人材の養成、グローバル化への対応、そして共生と相互理解の実現をめざす、ということです。その学問は、地球社会形成領域、地球文化形成領域、交流コミュニケーション領域に分かれ、それを学ぶために、必修の学部基礎科目と学科基礎科目を学び、それに選択科目を合わせて、卒業研究を行い、必修の卒論を書きます。卒論の完成が目標となっています。その他に外国語と情報科目を学びます。学生たちは、このほかに NPO、NGO に関わります。私たちがその他に重視しているのは、留学生で、受け入れも行い、派遣も行っています。そのために協定校に送っています。学生はさまざまな活動をしています。資格としては、教員免許と博物館の学芸員資格が取得できます。大学院は、博士前期課程が 3 専攻あり、博士後期課程が今年で完成年度を迎えました。

岡田 平成 7 年度に学部で学生を受け入れ始めて 15 年が経ち、国際学部完成年度の翌年である平成 11 年度に修士課程、その後平成 19 年度に博士後期課程の学生受け入れが始まりました。

高際 先生と徐先生には特にカリキュラム、教育、学生指導、入学試験について評価をお願いしたいと思います。

奥田 定員が100名は、私の大学は305名で、教員は少し多いですがほぼ同じですから、国際学部は非常に恵まれています。そうすると教員1人あたり5名ほどとなり、非常に丁寧な指導ができるのではないかと思います。しかし多様性の面からすると、305名ではかなり個性のある学生が入ってくるが、100名それも2学科に分かれていると、多様性の面で問題ではないかと思われました。

もう一つは、国際学という学問は、私の学部の国際関係学と同じように、ディシプリンということで問題はないか。よく就職活動で国際関係学とはなにかということ聞かれて学生が困るということがあります。日本で国際という名のついた学部は25年くらいしか経っていない。企業の人たちはほとんど経験していない。学生も教員も説明するのに苦労している。同じ苦労をしているのではないかと思う。国際学と国際関係学はどう違うのか。また国際社会学科と国際文化学科はどう違うのか。また学科が違うと入試も違う。どのようにしているのか。学科制にしようという議論もあったが、今のところ1学科で柔軟性を重視しようという。2学科の交流はどうなっているのか。私の大学では、1年生のときは1学科で、2年のときに、コースに分かれて行きます。また国際社会学科には、法律、経済、政治が入っている。私の大学では、コースを3つに分けています。同じ学科に3つ入っていると、系統的な履修ができるのか。履修モデルを示して、系統的な履修を促すということをやられているのか。そうすれば学生が何を履修していいのかわからないということはないかもしれない。さらに地域について、総合的な学習を進めるためには、履修モデルがあればよいと思います。

高際 学生の多様性については、当初から文科省の指導があって、多様な学生が入学するような入試制度を作ってきました。一般選抜は学力試験ですが、推薦入試、帰国生、社会人、私費外国人留学生、3年次編入などの特徴ある入試制度を作ってきました。推薦入試では集団討論により、帰国生は両親に伴って外国に行った学生だけでなく、自ら外国の高校に入学し卒業した学生も加えました。このようにして、多様な学生が入学しています。それから地域からみても全国から来ているということが言えます。

友松 学生の出身県を調べますと、これまでの学生全部にしますと、ほとんどの県から来ています。まだ来ていない県がありますが、1県だけで、それは神奈川県です。(一同驚く)ただ男女比は一貫して7割5分が女性で、2割5分が男性です。

奥田 私たちの学部は最初は女性が6割弱でだんだん7割になりましたが、最近は男性が増えていきます。

友松 それに推薦では集団討論をしていますので、18才では女性が積極的です。

高際 まれに積極的な男子学生もいますがね。

友松 そういうときには男子学生は目立ちますね。

奥田 都道府県のほとんどから来ているというのは、国立大学で唯一の国際学部だということ

とですかね。

岡田 栃木県はそれほど多くない。他の学部は栃木県出身が多いのですが。

高際 それでは、2 学科制について。

佐々木(一) 国際社会学科は社会系、国際文化学科は人文系ということで、入学時から学科に属して、学科内で指導します。そのために入学時から学科で違ったタイプの学生が入ります。しかし違うとはいっても、学部基礎科目はどちらの学科の学生にも必修ですから、共通の科目を学びます。それから 3 年次になって学科を越えて卒論に関わる科目を選ぶ学生もいます。その意味では柔軟に対応していると言えます。

奥田 どのくらいの学生が学科を越えて卒論に関わる科目を選びますか。

佐々木(一) そんなに多いわけではないですが。今年は私の研究室では 5 人のうちの 1 人の学生が社会学科でした。

高際 私の研究室では一昨年 8 人のうち一人の学生が国際社会学科所属でした。研究室に入るためには、演習をとる必要があります。

友松 3 年次に演習は 2 つが必修ですから、そのうちの 1 つが研究室の選択になります。

重田 私は私立にいたので、分かるのですが（立命館は分かりませんが）、研究室の前に資料室があって、そこに学生が集まります。そこでは研究室に所属しない学生とも、院生とも交流があります。ですからここには教員と学生の間一体感があるんです。これがこの学部の特色ではないかと思います。

友松 試験を受けて学科が変わることもできるのですが、転科試験を受ける学生は多くない。ということは、学科の壁は低いのではないかと思います。

岡田 奥田先生の立命館大学は一学科のために柔軟性があるということは、記憶させていたきたいと思います。

奥田 私立の場合と異なるのだとは思いますが。交流があった方が好ましいということです。

岡田 入学時には学部全体の合宿研修がありますので、学科を越えて交流をすることはできます。

友松 入学時に友達を見つけないということがありますから、1 泊 2 日の宿泊研修は、交流のいい機会だと思います。

奥田 どのように宿泊研修を行っているのですか。

高際 まず全体で話をしまして、それから学科に分かれて研修を受け、全体でレクリエーションを行うということを行います。

岡田 交流しやすいように、活動をきめていない時間帯があります。

高際 それでは 3 番目の国際社会学科の政治系、経済系、社会学系の専門科目について、学生の履修姿勢の問題と、ゆるやかなコース制を作るかどうかという問題について。

重田 パンフレットに沿って説明します。学生がどのように履修していくかを考えますと、4科目が学科の必修になっています。国際政治論と国際法と国際経済論と国際社会論。これらを選ぶのではなくて、全部学びます。その上で、選択科目を履修していきます。つぎに教員紹介の欄がありまして、そこを見ますと、行政学、国際協力論や国際関係論などユニークです。学生は3年になると演習を履修しますので、その演習に関係する科目、アフリカとか中東とかという科目を学びます。

友松 履修ガイドの方をみていただきますと、これが先生の言われるコースにあたるのではないかと思います。ここには一部国際社会と国際文化が融合した領域があります。来年はこれを教員別の履修ガイドに変わります。いわば教員が35人いるとすると、35の専門店があるようなものです。

佐々木(一) それはその通りなのですが、カリキュラムに即した履修もあり、それに足して、専門店方式があるわけです。

奥田 これを最初みたとき沢山あるなと思いました。(笑) 100人の学生にこれだけの先生がいたら、学生は選ぶのに苦労するでしょうし、分けたら8人とか5人とかになるでしょうか。細分化されるのではないかと思います。

高際 4番目に移りまして、それぞれの学科の専門科目の中に地域科目が入っていることの、メリットとデメリット。ある地域の政治、経済、文化を総合的に深めることはできるのだろうか、という問題について。

重田 教員紹介をみてもらいますと、アフリカ、中東、南アメリカ、タイなどの地域を研究しておられる先生がおられるので、ユニークなのではないかと思います。これに比べてインドなどの先生がおられないということはありますが。それに学生は留学してその地域を学ぶことができる、ということが出来ます。

高際 それを総合的に深めることができるかという問題については、どうですか。

友松 社会科学がアジアを中心として、文化の方は北米とヨーロッパを中心としており、それぞれの教員はディシプリンをもって研究しておられるので、地域とディシプリンの組み合わせでできている、ということで、私は問題を感じていないのですが。

奥田 教員の数に限られているので、地域を限るとか、ある地域の社会学的な問題にするとか、しなければならないのではないかと思います。

高際 確かに問題ですね。しかしたとえばラテンアメリカについてはご専門は経済ですが、なんとか文化も担当していただいているというのが現状です。私もイギリスの文化を担当していますが、他の先生にお尋ねして、対応しています。無理なところはあると思いますが。

それでは海外留学について。

奥田 協定校の紹介がありますが、広げていく場合のご苦労をお聞かせいただければありが

たい。

岡田 協定校で向こうから送りたいが、こちらから行きたがらないという場合があって、難しいです。

奥田 授業料の問題がありますね。

佐々木(一) まず大学間と学部間の問題ですが、大学間が多いのですが、最近は学部間の協定も増えています。セントラルランカシャーの場合は学部間協定です。

高際 先生が増やされましたので、そのご苦勞をお話してください。

佐々木(一) 交渉が始まる時点では相手が見えないということが大変です。大学間は複数の学部が関わりますから、そこが難しいというところです。教員の意識が重要で、濃淡がありますし、事務組織が十分でないところがあります。

奥田 語学水準はどういう基準を作っていますか。

佐々木(一) 英語の場合は基準を作りますが、それ以外の言語は必ずしもそうになっていないです。

高際 今年、受け入れで、英語能力が低くて、学部に行けないという例ができました。これは初めてです。

奥田 英語に強い学生を確保するという事は考えていますか。TOEFL で 550 という事はどうでしょうか。

高際 それは大変に難しい。

奥田 高校の段階で推薦入学で確保していかないと、交換留学を続けていくのが難しいと感じています。

高際 立命館のように長い歴史をもっているところはそうかもしれませんが、まだ私たちはそこまで行っていません。それにアメリカは学費の相互不徴取が難しいのですが、なぜかできてしまいました。

奥田 日本の高校生からすれば TOEFL520 でも高いといえます。ですからこうした学生を受け入れる大学を探すことが大切です。

高際 じつは国際学部は最初からそう考えていて、たとえばオーストラリアのビクトリア大学はそのような学生を受け入れてくれています。ところがそこで勉強してくると、600 くらいになります。ただ、行けばなんとかなると考える学生がいるのですが、それは危険です。

佐々木(一) 送り出しの地域も大切なのですが、希望者がいないという場合もありますので、毎年 11 月に説明会を開いていて、学生に周知させています。交流の実績については、表を見ていただきたいと思います。

奥田 留学の 4 月、9 月の問題があります。授業への影響はどうでしょうか。

高際 授業を学期にまとめたので、それはある程度解決されたと思います。

奥田 帰国が10月にずれこんだり、5月の連休後になったりする問題があります。アメリカではこうなるので、4期制にせざるを得ない。ところがそうすると日本の学生に影響が大きい。

高際 交換留学でどのくらい行かれますか。

奥田 2割くらいです。

高際 国際学部はまだそれほど多くはありません。それでは留学生の受け入れとカリキュラムについて。

奥田 留学生の数などについては表でわかりましたので、2番目の留学生の日本語能力についてですが、こちらでは英語で授業を受けることができますようですが。

岡田 いろいろです。こちらには留学生センターがありますので、そこで日本語教育を行っています。

奥田 124単位を英語で教えるのは難しい。

岡田 英語圏からの学生は少ないので。

奥田 非英語圏から来る学生も英語で受けるということもあります。

高際 英語基準で受け入れるというのは、試験も英語ですか。

奥田 そうです。アジア太平洋大学では完全に英語基準です。これからはこれが留学生の基準になるのではないかと思います。しかし、124単位を英語でそろえるのは大変です。これからは大きな課題を抱えることになります。日本語教育のそろった国というのは限られます。これからは日本全体の課題になると思います。しかし、卒業まで英語でやる方がいいとは思いませんが。

友松 そうすることで多様化したのですか。

奥田 アジア太平洋大学は、明らかに多様化しました。

佐々木(一) 私費外国人留学生は日本語を勉強してきますから、大丈夫ですが、交換留学生や日研生は日本語の教育を多くしています。日研生には特別演習を教えています。「現代と日本語Ⅰ」「現代と日本語Ⅱ」についても日研生の科目です。

高際 それではインターンシップについて、友松先生お願いします。

友松 院生のインターンシップ制度はありませんが、自主的にインターンシップを受けています。ただし博士前期課程の国際交流研究専攻については、「国際学臨地研究」は実際にはインターンシップです。

奥田 受け入れ先は自分で探すのですか。

友松 そうです。ただ国際交流研究専攻は海外経験のある学生が多いので自分で見つけてきます。

奥田 大変ではないですか。

高際 確かに全部が海外経験があるわけではないので、そういう意味では大変です。

友松 博士後期課程は臨地研究が必修で単位数は4単位。これもインターンシップ的な役割を果たしています。インターンシップそのものではありませんが。

前期課程の国際交流研究専攻では、毎年10人程度、臨地演習に出かけています。

学部のインターンシップは、立命館のように大規模なインターンシップ制はありませんが、「国際学インターンシップ」でインターンシップを行っています。これは自分で探してきます。ただし事前指導を私が行っています。それで行って来て、報告書を書いています。始まった当初は30名から40名いましたが、現在では10名、去年は7名でした。その他に文科省から助成金がでて、国際キャリア教育という分野を始めました。その中に新しい科目6科目を開設しましたが、そのうちの2科目がインターンシップで、「国際キャリア実習」のIとIIがインターンシップで、Iが国内、IIが海外で、インターンシップ先を今さがしているところです。これからは「国際学インターンシップ」を廃止して、「国際キャリア実習」にまとめ、充実させていきます。

高際 それでは入試制度に入ります。まず学科の振り分け、学科ごとの合格水準は異ならないか、ということですが、入試は学科ごとに行われますが、合格判定は最終的に教授会で行われますので、水準は分かるわけです。そこから言えることは、合格水準はそれほど違わないということです。入試の多様性については、各入試別にやりかたが異なります。一般選抜は、入試センター試験と外国語、小論文です。推薦入試については、学校長の推薦と書類審査、それと集団討論です。社会人特別選抜では、英語と小論文、面接です。帰国生も小論文と面接です。3年次編入試験も、小論文と面接。特別選抜は個性が測れます。編入生に聞きますと、短大や高専の学生が多いのですが、視野が広がったと言っています。編入生が他の3年生に影響を与えています。私費外国人留学生も日本留学試験と、英語、小論文、面接を行っています。おかげで多様性は保たれていると思います。

奥田 100名という中で多様性を保つと、むしろ細切れになるのではないのでしょうか。

高際 一般選抜で入った学生の中には最初推薦に対して楽に入ったという考えがあるようですが、時間が経つうちにそれぞれの個性を理解するようになってきているように思います。

岡田 当初からやってきましたが、やる価値があるという判断です。

高際 9月に博士前期課程入試、10月に3年次編入、11月に推薦入試、12月に転部転科、1月にセンター試験と社会人、帰国生、私費外国人留学生入試、2月に博士前期課程入試と一般選抜、3月に博士後期、と非常に多くて、確かに忙しいとは言えます。

岡田 推薦入試については、追跡調査をして、学力が一般選抜に比して悪くない、というより、むしろ優れているということが出来ます。

高際 倍率が高いですから。

友松 編入生についても、問題はまったくないということができます。

岡田 編入生は入学動機が強いですから、入学してがんばります。

佐々木(一) 社会人は学士課程を終って、さらに大学院に進む例もあります。

奥田 定員が少ないと受験生がいなくなる。これは私学には問題です。ところが多様な学生を確保しようとする、そうした制度を作らざるを得なくなる。難しいところです。

高際 履修案内などの学生へのガイダンスに移りたいと思います。

奥田 今シラバスをきちんと書かないといけないのですが、学生はシラバスを利用して履修登録をしているのでしょうか。

重田 履修案内はこのようですが、来年度から履修ガイドは新しくなります。規程も新しくなります。

高際 履修案内だけでは分かりにくいので、履修ガイドを使いながら、時間をかけて理解していきます。

奥田 入学して2週間で履修登録しなければならないので、上級生を使って説明する制度を作っています。

高際 シラバスの使用状況は悪いです。インターネットに載っていますが読まれていません。先輩のアドバイスで履修するということが多いと思います。昔の開講科目案内の方がはるかに分かりやすい。シラバスは授業で配った方がいいように思います。シラバスは、高校生の方や社会の方が読んでるように思います。

奥田 文科省向けということになるのでしょうかね。

高麗大学 徐承元教授による聞き取り調査（要旨）

平成 22 年 2 月 18 日（木）午後 3 時～

出席者：徐 承元 氏（高麗大学日語日文学科学科長副教授）

岡田三郎学部長，友松篤信評議員，高際澄雄点検評価委員長，

倪永茂点検評価委員，重田康博国際社会学科長，佐々木一隆国際文化学科長，品川昇事務長

岡田 国際学部・国際学研究科では 1 年おきに外部評価を行っていますが、今回、徐承元先生の他に、立命館大学の奥田宏司先生、栃木県経済同友会筆頭代表監事板橋敏雄氏、栃木県健康管理士会会長佐久間辰雄氏に外部評価委員をお願いしています。それでは、よろしくお願いたします。

高際 事前に評価結果をいただいていますので、読ませていただきます。（徐教授が事前に提出した総括を読む。）

徐 韓国でも外部評価が始まっていますが、私の役割はどのようなものかお教えいただきたいと思います。

高際 国立大学が法人となり政府から運営費交付金が出ていますので、適切に大学法人の運営が行われているかを見て行く必要が出てきました。それで外部評価をお願いしたわけです。

徐 評価結果が 2 枚を越えているのではないかと心配ですが。

高際 いえ、2 枚以上ということです。それではカリキュラムについてです。（評価結果を読む）。したがって、徐先生の指摘される問題点は、『多文化公共圏』の下位理念として『国際学の構築』が挙げられているが、その目指す学問的な方向性が明確でない、「専門外国語科目が 10 単位では不十分ではないか」、それと『朝鮮語』と『韓国語』が混在していること』ということになるのでしょうか。それでは「多文化公共圏」と国際学の構築については、友松先生にお願いします。

友松 国際学については明確なコンセンサスがあるとは思えない。それに国際学の教員はいろいろな学部を出ているので、ディシプリンが異なります。その中で共通概念としての国際学をどのように打ち出していくかは難しい。

佐々木（一） 国際学部には国際社会学科と国際文化学科があるので、社会科学と人文科学

とバランスをとっていこうとしています。他の大学に国際関係学部や国際学部がありますが、社会科学に重点があります。このようにバランスのとれた形で国際学部を置いているところはありません。国際学の定義ではないですが、これが宇都宮大学国際学部の特徴です。

友松 それに外国語の配置もこの学部の特徴となっています。それに地域研究ですが、国際社会学科ではアジアの地域研究、国際文化学科では北米とヨーロッパの地域研究が行われています。

岡田 国際学の定義ではないのですが、国際学部が多文化公共圏センターを設置して2年が経ちました。ここでグローバル教育とか外国人児童生徒教育を取り上げ、また国際キャリア教育を行うなど、個々の問題をやって特徴を出そうとしています。

高際 高校生に説明するとき、私は国際的な事象または問題を学際的な手法で研究する学問が国際学だと言っていますが、結構うまく説明できていると思います。それに卒論が必修となっていますが、学生は卒論を書く過程で、いろいろな先生に教えてもらって、学際的手法が理解できてきます。

岡田 文科省からは、国際、人間、環境、総合などの名前がつく学部については、教育の内容や成果には厳しい指摘があります。学問的には別だと思えます。

高際 高麗大学ではどのようになっていますか。

徐 私は政治学が専門ですが、このような模索する試みは面白いと思います。しかし、いろいろな学問が入っているので、学生たちは迷わないか。高麗大学では政策学科が法律学科に編成されて、分かりやすくなりました。それに教育目標を明らかにした方が分かりやすい。私たちは学生に日本語能力検定1級の合格を卒業条件としています。そのために6カ月の留学が義務づけられています。国際学部のように専門の範囲が広いと、どのように特徴づけるのか、分かりにくい。国際学部全体についての疑問です。

高際 学生が自主的に留学先を選ぶのですか。

徐 日本の30大学と提携しています。経済的な措置をしないと行かないので、国立の埼玉大学の場合は13万円の奨学金が出ます。私立の場合は、早稲田大学では寮の部屋が提供されます。

佐々木（一） 国際学部を設置した際の制限から現在のようになっているのですが、現在では、例えば中国について勉強する場合、いろいろな中国研究者の先生から勉強できます。ただ全体とすると、国際文化学科の場合、比較や相対化の観点からの研究が特徴となっています。

岡田 実際に出された修士論文を見ても、宮沢賢治とアリス、ブリティッシュロックとジャーマンロックなど、比較の観点がよく出ているのではないかと思います。外国語についても、比較研究ができます。

高際 外国語が少ないのではないかという問題に進みます。佐々木先生お願いします。

佐々木（一） 卒業要件は10単位ですから、2ヶ国語を取得する場合は、1つの外国語を6単位、もう1つの外国語を4単位という形で取得します。しかし4単位は最低であって、例えば朝鮮語であればさらに朝鮮語講読などの科目がありますから、10単位まで取得できます。授業科目としては多くの語学系科目を用意しています。さらに今年度からは、たとえば英語では上級英語会話と Directed English Reading の科目を新設しました。国際学部ではこのように学生たちが豊かに学べる環境を作っています。

高際 学生たちは専門外国語に進む前に、共通教育の外国語科目で基礎や講読を学びます。ですから専門科目に来る前にすでにある程度学んでいます。また今年からですが、初めて学ぶ外国語、つまり英語以外の外国語については、学び方を入学直後にガイダンスを開いて指導しています。また初めて学ぶ外国語でも、実用検定試験の一定の級に対応できるようになっています。つまり、その外国語の水準はある級のレベルであるという意味です。

徐 結構です。

高際 朝鮮語と韓国語という名称の問題に移ります。

岡田 国際学部で、朝鮮語と呼ぶように決めました。しかし大学入試センター試験では韓国語と呼ばれているので、2つの呼び方が混在しているわけです。

徐 韓国人には違和感がありますが、分かりました。

高際 （評価結果を読む）大学院の募集定員と他学部出身者の問題です。過去に大学院の入学者が定員を下回ったことが現実には起こりました。日本全体に大学院が増えて、応募者が少なくなっています。国際学部の学生も、東大、京大、東北大、一橋大、筑波大などの大学院に行ってしまう。それで、国際学部卒業生で応募する学生が少なくなっています。

岡田 博士後期課程でも、1人の学生は博士前期課程修了後、名古屋大学大学院に行くことが決まりました。学生にとっていいことですが、我々としては残念です。

高際 大学院に入学する留学生で難しい点は、これまでに国際学を学んでいないことです。2年間で国際学とは何かを教えて、修論を書かせるのは難しいところがあります。研究生で1年間勉強して入学する院生（留学生）はそこができるので、有り難いと思います。

友松 国際学研究科と研究者養成の他大学大学院を比較するのは間違いです。国際学研究科の特徴は、国際協力などで経験を積んだ社会人がいることです。その人たちは自己の経験を学問により客観的に位置づけようとしています。

高際 博士後期課程はその点成功しています。博士前期課程の課題は、社会人の学びやすい環境を作ることです。留学生や若い学生は昼の開講を求めているので、夜間開講は難しいことがあります。

重田 私は隔年開講で昼と夜を交代しています。

高際 基礎的科目は1年次で開講しなければなりません。隔年での開講は難しいところです。

重田 長期履修生がいるので、私の学生には問題はありません。

友松 インターネットでテレビ会議システムを入れています。これは今まで博士後期課程でしか使われていませんが、前期課程でも使うことを考えるべきかもしれません。

岡田 入試の在り方についてご意見を頂いていますが、社会人、留学生について考える余地があるかもしれませんね。

侃 社会人には筆記試験が免除されているので、社会人にはやさしい試験制度だと思います。留学生には筆記試験がないと、日本語能力が測れません。必要だと思います。それに試験問題もだんだんやさしくなっています。

徐 高麗大学は大学全体で決めてしまうので、学部が決める余地がありません。ですから今は面接だけしかありません。卒業大学で判断します。高麗大学は、ソウル市内の大学です。面接の中に試験を含めます。

岡田 時間はどのくらいですか。

徐 10分の中にいろいろな工夫をします。文章を読ませて、どう考えるか言えとか。TOEFLの点数なども考慮します。日本語検定試験のレベルも考慮します。社会学などについてはそういうものはありませんので、試験に含めます。

佐々木（一） 私たちは広い観点から問題を作っています。

岡田 ソウル市内に限るとは限定的ですね。

徐 それでも競争倍率が70倍くらいになります。日語日文学科があるのは高麗大学だけです。から、そうなるのです。本部は大学院を大きくする方針をとっているのです。困っているわけです。学生数を3分の1くらいにして、質の高い学生に絞りたい願望をもっています。人数が多いと指導ができません。

高際 すると15人の先生で70人教えるということですか。

徐 研究者コースで70人です。それに教育者養成コースもあります。学部の日本語教育コースには40から50人おり、大学院には20人くらいいます。

佐々木（一） 博士前期課程の目的は高度職業人養成ですが、留学生の中には研究者になりたい学生もいますので、研究者も副次的に養成しています。

高際 学部の教育もされていますか。

徐 科目は学部は2科目、大学院が1科目。3時間で3単位、学部は75分が2回です。

高際 授業が少なく、指導が多いということですか。

徐 それはゼミということですね。教員は、大学院生1人あたり一定額の指導費を学期ごとにもらいます。

重田 給料に反映されるのですか。

徐 給料に反映されます。それに学部学生 8 人くらいを指導教官として指導するようになりました。指導のために学部学生に会うと、教員に指導費が出るようになりました。

高際 学生の卒論の指導はどうなっていますか。

徐 学部に卒論はありません。そのかわりに日本語や英語の資格試験を受けなければなりません。

高際 国際学部の入試制度を説明しますと、一般選抜が 44 人、推薦入試が 42 人、帰国生が 4 人、社会人が 4 人、私費外国人留学生が 6 人です。高麗大学でもこのような特別選抜はあるのですか。

徐 日本に倣って最近始めました。留学生の試験も、推薦入学もあります。入試を何回かに分けて、優れた学生を取ろうとしています。

高際 大変ですね。

徐 その分、教員には試験手当が出ます。

高際 それでは学生指導体制に移ります。(評価結果を読む)。国際学部創設以来、教員と学生の距離の近い指導体制を取って来ています。新入生合宿セミナーから始まって、学年指導、卒業論文指導、大学院の指導体制と、指導体制を整えて来ています。

岡田 3 年からゼミが始まり、3 年の後期には卒論指導教員を決定しますが、ゼミから数え 2 年間指導を受けることになります。

高際 しかし現実には就活が厳しくて、3 年生の 12 月から就職活動が始まりますので、卒業研究の授業で全員がそろふことが難しくなっています。韓国ではどうですか。

徐 国際学部の就職率は 95% ですが、私たちは 80% です。学生が内定で決まっても、いい会社でないと行かないのです。もうちょっと勉強したいといって残る者がいます。日本から韓国に帰って、良いと思う制度はゼミ制度です。

岡田 それはあるでしょうね。博士前期課程では複数指導教員制度をとっていますが、一人の教員に偏る場合もあります。

高際 インターンシップということが出ましたが、昨年文科省で、国際キャリア教育のプロジェクトに助成金が出ました。

岡田 これまで国際キャリア合宿セミナーというプロジェクトを行っていきまして、それが認められて助成金が出たということです。

高際 インターンシップを受けた学生は、就職がいいのではないですか。

友松 それは分かりません。追跡ができないのです。

岡田 就職との関係とは別に、インターンシップは必要ですね。

徐 この点に関しては、日本の方が進んでいます。

重田 学生を連れてアジア学院や足尾銅山を見学させています。足尾銅山では植林活動や中

国人墓地を見せたりしています。東京では私の関係しているオックスファムの事務所に連れて行きます。

高際 ご専門が NGO ですので、よく学生を各地の団体に連れていかれています。

佐々木（一） 参加型授業について触れていただいています。インターンシップやフィールドワークは参加型授業ですが、英語会話の合宿訓練や、オーストラリアでの英語や台湾での中国語の海外研修も参加型授業だと言えらると思います。

高際 点検体制についてですが、このように述べられておられます。（評価結果を読む。）FD 研究会を立ち上げられた佐々木先生か倪先生にお願いいたします。

その前に、学科長と専攻主任の横の連絡がどうなっているのか、ご説明をお願いします。

岡田 運営委員会を作って学科長、専攻主任の横の連絡をとっています。そこには研究科長補佐を置いて、博士後期課程を主にみてもらっています。教育研究評議会には評議員が出席し、大学執行部と連携を取っています。

高際 国際学部では会議や委員会が多すぎます。韓国はどうですか。

徐 韓国に帰っていいのは、会議がないことです。日本で苦しかったのは会議です。毎週水曜日が会議日で、苦しかったです。

高際 委員会はないのですか。

徐 役員が決めますが、学長選は厳しいです。1 年くらいかかります。選挙活動はつらいです。

重田 お金がかかるのですか。

徐 かかります。学長になると、政治家の道が開かれています。今の大統領も学長出身です。

高際 文化が違いますね。日本の場合は直接に政治とは関わらないですね。

倪 FD 委員会は特殊な委員会です。ふつうの委員会は内容が決まっていますが、FD 委員会は内容が決まっていない。教育のことも、研究のことも、組織のことも関わり、全員が出席します。その時々の問題を議論します。

高際 それで教育内容などが、いろいろ変わりましたね。

倪 カリキュラムも変わりました。

佐々木（一） FD 専門委員会は 5 人で、教務委員から 1 人入っています。最近だと 3P（アドミッションポリシー、カリキュラムポリシー、ディプロマポリシー）を議論しました。初期の頃は新人の先生に感想を發表してもらいました。学部全体で教育内容を充実させてきました。

高際 この形式を提案したのは友松先生です。せっかくの機会ですので、高麗大学について伺いたいと思います。同じ APSIA 加盟している大学ですので、お尋ねしたいと思います。

岡田 資料の方ですが、1 年間で 35 名が留学しています。1 学年が 120 名くらいいますが、

30%が留学します。留学生は、学部 28 名、大学院 43 名で、大学院の半分が留学生です。留学生は研究生も含めて 132 名。常にこのくらいの留学生がいます。高麗大ではどうですか。

徐 全員で 3000 人です。その 2 割が大学院生です。中国人が半分くらいで、日本人が 3 割です。

岡田 留学に行く学生はどうですか。

徐 かなり多いです。英語圏が多いです。ブリティッシュコロンビア大学には 500 名の寮があります。人民大学にも 500 名の寮があります。

高際 3000 名というのは、全員ですか。

徐 1 学年です。

高際 APSIA についてはどうですか。

徐 本部がやっていることなので、知られていません。

佐々木（一） 留学生の奨学金はどうなっていますか。

徐 大学院生は学費の 7 割免除です。大学院生には 100%奨学金を出しています。

高際 日本は貸与です。

徐 韓国は返す必要はありません。

倪 日本は 50%で、全員ではありません。

岡田 これだけ来てくれているのはありがたいですね。

徐 韓国では GNP5%を高等教育に使うという公約です。

佐々木（一） 寮はどうですか。

徐 施設は立派ですが、高いです。5 万円くらいします。

倪 その点は日本の方が安いですね。

高際 でも数が少ない。

徐 寮に 2000 人くらい入っています。

高際 日本では寮を充実する必要がありますね。日本人学生にも寮が必要です。

このくらいでよろしいでしょうか。それでは今日はありがとうございました。

**社団法人栃木県経済同友会筆頭代表幹事 板橋敏雄氏 およびNPO日本成人病
予防協会栃木県健康管理士会会長 佐久間辰雄氏 による聞き取り調査（要旨）**

平成22年2月19日（金）10時～

出席者：板橋敏雄 氏（社団法人栃木県経済同友会筆頭代表幹事）

佐久間辰雄 氏（NPO日本成人病予防協会栃木県健康管理士会会長）

岡田三郎学部長，友松篤信評議員，高際澄雄点検評価委員長，

重田康博国際社会学科長，佐々木一隆国際文化学科長，品川昇事務長

岡田 板橋様、佐久間様、お忙しいところご足労いただき、ありがとうございます。国際学部は、1年おきに外部評価を行っております。外部の方の目線で国際学部での教育、研究、学生の勉強の環境や、就職支援など見ていただき、忌憚のないご意見、ご提言をいただきたいと考えております。今年の場合は、2名の地域の方、経済同友会代表幹事板橋様、NPOの会長佐久間先生にお願いしています。また、国際関係の事柄を扱う大学の連合体APSIA加盟の大学の先生2名にもお願いしました。本学でもAPSIAに加盟しています。本年2月4日にAPSIA加盟の立命館大学より一名の先生に来ていただきました。また、昨日は同じくAPSIA加盟の韓国・高麗大学の先生一名にも来ていただきました。外部評価は、これら4名の委員の方をお願いして行います。

高際 点検評価委員会委員長の高際と申します。本学ではイギリス文化論を教えています。国際学部立ち上げから15年、今見直しを行っております。本日は友松先生にご協力いただいております。さて、国際学部の学生の就職は、現在非常に難しい状況になっております。主として、板橋様と佐久間様には、学生の進路、特に就職に関して、この国際学部の中で就職支援、指導がきちんと行われているかどうか、専門家の目で見ていただきます。その前に、他に来ていただきました3人の先生方にも自己紹介をお願いします。

友松 評議員の友松と申します。経済団体から1名、市民団体から1名ということで、経済団体は栃木県経済同友会筆頭幹事の板橋さんにご了承いただきました。市民団体は宇都宮市民活動サポートセンターの安藤事務局長に相談したところ、佐久間先生が市民団体に非常に理解が深く、いろいろなかたちでサポートセンターの活動等にかかわっていただいていると、

ご推薦いただき、佐久間先生にもご了承いただきました。

重田 国際社会学科長の重田と申します。一昨年国際学部に設立されました多文化公共圏センターの副センター長もしております。本学では「国際市民社会論」ということで、国際市民社会、NGO・NPO等を教えております。

佐々木（一） 国際文化学科長の佐々木と申します。学部、研究科ともに言語学を教えます。学部では、英語も教えています。私は長らく留学生教育もやってきました。

高際 評議委員、また学科長の方々においいただきまして、本日は外部評価に関するご質問にお答えする形で進めてまいります。では、板橋様からあらかじめ質問をいただいておりますので、それに関して進め、佐久間様からのご質問もお聞きしながら進めていきたいと思っております。まず、最初の質問は、「学生、特に留学生の入学試験はどのようになっているのか。多様な留学生を受け入れる試験制度になっているか」です。まずシステムについて簡単にご説明します。入学試験については、私費外国人留学生選抜という特別枠があります。その選抜試験を受験するに当たってまず、国全体で行われる日本留学生試験を日本語、理系、文系の科目を選んで受験します。本学の試験としては、語学試験と小論文、そして面接があります。語学試験では、どの言語を受けるのか選ぶことになっています。母語を受けてはいけないということで、多くの学生が日本語を取ります。英語を取る学生もいます。他言語を選択することも可能ですが、ほとんどが日本語か英語での受験です。本学では日本語で授業が行われますので、小論文の試験では、日本語で論文が書けるかどうかを見ます。最後に面接でその学生が、日本語がきちんと使えるか、この大学で4年間をきちんと過ごせるかを見ます。今から10年前は、韓国それから中国、台湾、マレーシアからの留学生が受けており、非常に多様でした。今は中国が圧倒的に多い状況です。以前は中国と韓国が半々の時代もありましたが、韓国が減り中国が増えました。台湾からの留学生を見かけることも少なくなりました。大学院には留学生が多いです。小論文は英語でもよいのですが、英語で受ける学生が少なく、今年はベトナムの学生が英語で受験した程度です。

板橋 ベトナムからの留学生はいますか？

高際 おりますが、多くはないです。われわれはインドネシアや、マレーシアあるいはフィリピンからも来てほしいと思っています。けれど、漢字が障害になっている感じを受けています。今お話ししたのは、私費外国人留学生試験についてです。もう1つ大学院の試験があります。こちらは先ほど申し上げたベトナムや、英語圏から英語で受ける学生もおりますが、受かるのはやはり難しいです。大学院にも、留学生特別選別がありまして、小論文と面接を行っております。やはり中国人が増えているのが実情です。交換留学生もおります。交換留学生は入学試験を受けないで本学にまいりますので、留学生対象の入学試験は学部の私費外国人留学生試験と大学院の留学生特別選抜になります。交換留学生については、国際交流委

員会で長く活躍された佐々木一隆先生にお願いします。

佐々木（一） その前に、学部の入試に関して1点だけ補足します。私費外国人留学生選抜ですが、渡日前に日本留学生試験を受けることになっています。この試験には日本語が入っていますので、本学の試験には日本語はなく、英語の試験が行われます。その際の英語試験ですが、これはTOEFLやTOEICに頼らず、国際学部の教員が試験問題を作って、独自の英語試験を実施しています。

では、交換留学についてですが、基本的に1年もしくは半年程度、協定校から留学生を受け入れています。その実績がこの一覧です。1枚目が、浙江工業大学から始まっています。平成17年度から22年度までの実績が挙げてあります表をご覧ください。国際学部が交換留学を受け入れている大学は、ここに挙げられた大学がすべてではありません。例えば、浙江工業大学は、工業大学ですが、文系も擁しているので、国際学部にも交換留学生在が来ることもあります。しかし国際学部か他学部かの内訳がないので、正確な数は分かりません。カセサート大学はかなりの実績があります。復旦大学、ビクトリア大学、祥明大学校、ノーザン・ブリティッシュ・コロンビア大学、電子科技大、エアランゲン大学とも交換留学の提携協定を結んでおります。復旦大学は中国、ビクトリアはオーストラリア、祥明大学校は韓国です。それからノーザン・ブリティッシュ・コロンビア大学はカナダ、電子科技大は中国、エアランゲン大学はドイツです。浙江師範大学、浙江大学は中国、内蒙古農業大学は、内蒙古なので、中国です。ボゴール農科大学はインドネシアです。

それから、寧波大学は中国、台湾師範大学は台湾、香港大学は中国、国立政治大学は台湾です。パラツキー大学はチェコ、モンゴル人文大学はモンゴルです。

板橋 ダッカ大学はバングラデシュで、モンゴル人文大学は外モンゴルですか。

佐々木（一） 外モンゴルです。ダッカ大学からは特に受け入れがないです。モンゴル国立農業大学からも来ていないです。天安蓮庵大学は韓国です。ノースダコタ大学はアメリカです。そして、フランスのオルレアン大学、この辺りの交換留學生は受け入れております。アジア工科大学はまだ受け入れていないです。全北大学校は韓国です。ほとんど受け入れはないですが、ヨエンスウ大学はフィンランドです。国立暨南国際大学は台湾です。2009年度の大学院パンフレットの17ページを見ると、国名が出ています。全体を見ると40を超える大学、そのうち半数以上は、大学間で交換留学の協定を結んでおります。その一方で、国際学部と先方の大学あるいは特定学部とを結ぶ学部間交流協定もありまして、17ページに載っております。

岡田 今年もドイツ・トリアー大学との協定が先日決まりました。

現在は、協定書に学長と私がサインをして、トリアー大学に送っているところです。

佐々木（一） ハノイ大学とも学部間協定を結びました。本学は国際学部のみですが、先方

は大学全体が対象です。実際に学生が来ていますが、まだ本学から派遣していない段階です。

高際 これまで説明してきたように、入学試験で入る学生と交換留学生在がいるので、国際学部には留学生が多いです。しかし、試験では、中国が多くなっている傾向があります。ロータリー米山奨学金は本当に留学生の支えになっています。今、留学生はアルバイトがなく、非常に困っています。ですから、学費滞納者が多く、年度末に駆け込みで支払う傾向があります。政府は留学生30万人計画を出しています。ようやく10万人という目標を達成したと思ったら、今度は30万人というわけです。日本政府からの経済的な援助が非常に弱いです。昨日聞いたところによると、韓国の高麗大学では、韓国政府の方針で、留学生の授業料を7割減免しているようです。それと比べると日本は支援が弱いと感じます。

板橋 日本は、留学生30万計画を発表しましたが、やはり具体的にそういうことが問題になると思います。ロータリー米山奨学会の理事長をやっている関係で、日本34地区のいろんな報告を受けます。前に大学の交換留学で来られた方が、多く受けてこられる現状です。その方々は優秀ですので、大学生と大学院生の両方を全国で毎年800人受け入れています。ロータリー米山奨学金は、大学生が毎月10万円、大学院生が14万、これは返済義務がありません。そこで、14億5000万円が毎年必要になります。全国のロータリアンにお願いして集めています。大学間交流の大学生を終えて受験される方が多いのですが、交換の約束をしたら、授業料は免除になるのですか。

佐々木（一） 協定を結ぶときに併せて、学生交流の覚え書を取り交わします。そこに双方の大学で、授業料の不徴収を謳います。行った先の大学では、授業料は取らないことになっています。

高際 しかし、その協定のために、アメリカとの交換留学協定をうまく結べない状況があります。ノースダコタ大学との協定締結は奇跡です。交流協定を結んでも、先方の大学は学費を取ることを主張されるので、なかなか交流協定締結ができない状況です。本当にロータリー米山奨学金は、留学生のあこがれです。10万円の奨学金を頂いても、返済不要というのはもう夢のような話です。本当に学生たちは困っていますので、ぜひともこれをお続けいただきたいと思います。

板橋 ロータリー米山奨学制度が始まって、40数年になります。最初は、貧困な学生に与えるという条件が付いていました。しかし今は、学業優秀で人物も素晴らしく、母国に帰ってからも日本との交流をきちんと続けられる方々を支援しようということで、貧困から学術や交流に大きく方向を転換しました。方向転換をしてから、だいたい7、8年、10年近くなります。

岡田 そういった国際交流の意識が強い学生も多くなっています。

自分が帰って、国を支えていく人材になろうという志を持っています。ベトナムやラオスな

どから来た人たちは、特にそう思っています。向こうの貧困の問題を、少しでも解決するために国に帰る。はっきり目的意識があります。

板橋 確かに、ベトナム人は、国を興していかななくてはならないという意思が強いです。そういうことから、全国でロータリアンと大学による大学推薦制度をつくりました。今年も馬場副学長に立ち会っていただいておりますが、全国でロータリアンと大学の推薦、大学推薦制度をやるようになりました。日本で勉強したことを母国に帰って役立たせたいという意志が非常に強いことを感じます。母国の建設のために役立てたいと、面接でベトナムの方たちはよくおっしゃいます。

高際 今、重田先生は、カンボジアとラオスでの交換留学協定締結に力を注いでくださっています。

重田 カンボジアのプノンペン大学と協定を結ぼうと交渉しています。

後期にはカンボジアから1人留学生が後期課程にやってくる予定です。磯谷先生にお世話になります。

佐々木（一） 先ほどの協定校とロータリー米山奨学会の関係で、私のところの院生が4月から奨学金14万円をいただくことになっています。協定校の中国の齊齊哈爾大学から来ている学生で、彼女は交換留学ではありませんでしたが、協定校の関係で本学に研究生として来て、勉強した上で大学院に進学しました。ほぼ1年奨学生をやるということです。この学生は齊齊哈爾大学で日本語の先生をしていました。ぜひ日本に留学して修士号を得て、戻って日本語の教員を続けたいという、はっきりした意思があり頑張っています。協定校からこちらに来て、大学の先生に戻るというケースを紹介しておきます。

岡田 齊齊哈爾大学の日本語関係を取り仕切っておられるのは、宇都宮大学への留学経験者です。

その方が日本語教育に力を入れておられまして、本学に留学した2名が中国に戻って先生になっています。初めの頃の方なので、もう大学では上の地位についているかと思います。

高際 卒業生が頑張ってくれているおかげで、強い関係が築けて、交換留学ができているのだと思います。われわれは多様な国を求めています、学部に関しては多様にはなっておらず、危機意識を持っています。

板橋 米山ロータリー奨学会でも、かつては中国、韓国、台湾が三巨頭でした。それが今、台湾が減り、韓国が減ってきたことが話題になります。中国だけが増えている。台湾に行くと、台湾もかつては日本に留学しようという意向が非常に強かったのですが、今は、アメリカに行く傾向があります。韓国も同じ傾向です。台湾に学友会ができて十数年になります。その学友会自身が、もっと日本に自分たちの後輩を送ろうという運動を起こしています。今年から始まったことですが、彼らが出し合ったお金で、日本から台湾の大学に留学する希望

者を毎年1名、学友会への醸金から奨学金を出してくれます。彼らは恩返しと言います。そして中国にも学友会ができました。共産党1党独裁の国でもあり、中国から圧力を受けるのではと、随分気を遣いましたが、彼らは非常に元気です。日本を知るのはわれわれをおいてほかにはないと言ってくれます。しみ出る水のように頂いた日本のロータリーからの愛情を、彼らは力を併せ、わき出る水のように、中国の次世代に日本を本当に理解させる運動を起こしてくれています。日本に対する恩返しとおっしゃっています。本当に驚いたのは、昨年3月28日に北京で最初の学友会が発足したのですが、昼食を挟んだ4時間の発会式が最初から最後まで日本語だったことです。日本から行きましたのは、理事長の私と副理事長、事務局長、在中国日本大使の4人です。最初から最後まで全部日本語です。その人たちはお互い友人の付き合いはありません。中国全土から集まり、留学年度も違えば、北海道から鹿児島まで大学も違います。その人たちが集まって、時折席を換えてお互いに名刺交換します。みなさん全部日本語で会話なさるのです。本当に僕は涙が出るくらいうれしかったです。中国人の中には日本を誤解している人が多いので、日本との関係をきちんとしてほしい。誤解を自分たちが覆していくのだと言ってくださいました。留学は大きな貢献と思います。

高際 次に、「学生が地域のボランティア活動にかかわっている程度はどのくらいか」について、青年海外協力隊や地域のボランティア団体との関係をお答えします。友松先生にお願いします。

友松 青年海外協力隊は、国際学部から毎年ほぼ1名は採用されます。今年は2名協力隊に合格しました。青年海外協力隊は、実務・社会経験を経たほうが、海外ボランティア活動がうまく行くという基本スタンスを持っており、社会人が優先される傾向があります。その中で、学部学生が毎年1名ほど行っている状況は、悪くないと思います。地域のボランティア団体との関係は、重田先生の方が詳しいと思いますが、国際協力NGOで、シャプラニールという日本の団体があります。

シャプラニール創設に加わった吉田ユリノさんが宇都宮市におられまして、国際学部の非常勤講師をしてくださっています。その影響で「シャプラニールとちぎ架け橋の会」という国際学部学生を中心とする学生組織があります。それから、国際学部には、模擬国連という全国組織の支部があります。模擬国連は、国際大会に日本代表を派遣しています。

板橋 模擬国連というのは日本の組織ですか。日本各地の大学に来ている各国の学生が行うのですか？

高際 日本にある国際組織です。日本の学生が、国連を模していろいろ議論するのです。

板橋 国際学部の学生さんが参加されているのですね？

高際 そうです。英語でディベートの練習をしています。

友松 リソース・ネットワークという団体は、宇都宮大学の学生が自分たちで立ち上げたフ

フェアトレードを行う団体です。フェアトレードとは、現地の人に配慮した交易条件によって途上国を支援するという考えです。公正な貿易、第三の貿易という名前でも呼ばれます。インドに貧しい女性たちのための職業訓練所があり、バナナ繊維で作ったバッグなどの手工芸品をインドに行って買い付けて、大学祭とか地域の様々な企画で売っています。

重田 その2つの団体が、去年、フェアトレード・ファッションショーを本学で行ない、新聞にも出ました。

板橋 そのような活動を、大学サイドから報道関係に働きかけて、ニュースにさせていただくことが大事だと思います。

重田 イギリスの大学やNGOが、フェアトレードタウンという運動をやっていて、去年、ヨークのNGOのグローバル教育センターの人がいらっしゃいました。本学でも環境やフェアトレードを紹介していきたいと、個人的には考えています。

友松 リソース・ネットワークは、本学近くの空き店舗を借りて、コミュニティカフェというレストランを、週に1回開いています。インド対象ですから、インドカレーなどを出しています。新聞報道もされています。国際学部の学生は、間違いなく、本学の中で最もボランティア活動に関心の高い学部と言えます。

高際 青年海外協力隊に関しては、大学院博士前期課程の国際交流研究専攻の特別枠に、国際貢献活動経験者特別選抜があり、青年海外協力隊の経験者が入ってきます。

重田 NGOの経験者もそうですね。

高際 数は少ないですけども、青年海外協力隊との関係がかなり密かなと思っております。これも友松先生のおかげです。

板橋 そのような場を作っておられると、その人たちが今度、社会に出てからね、必ず国際貢献の道を選ばれると思いますね。国際学部でただ英語や外国語を習ったということでは、出てから普通の社会人になることが多いです。しかし、そういう経験があると、必ずその人たちはチャンスがあれば海外に出向く道を選ばれると思います。日本の今後の経済発展を考えると、東アジアを対象に、日本人が今まで培った知識や経験、技術を持って、それぞれの国で頭角を現すことが、日本の生きる道ではないかとさえ思います。もう、日本の内需と言っても人口は減っていく状況です。中国やインド等の今まで購買力がなかった人が、少しずつ食べられるようになって、より高度な生活を願うようになれば、日本の技術を持って行って、そこで火をつけることが、日本の将来には欠かせないと、私は思います。宇都宮大学で、今お伺いしたことを熱心におやりになっていることは、まさに日本の将来の大きな土台づくりへの貢献と思います。

友松 青年海外協力隊の功績の1つは、日本と様々な国や地域との付き合いを多様化させたことです。戦後の国際交流は、日本の若い人を中心とするアメリカ等の先進国との姉妹都市交

流が中心でした。世界津々浦々まで青年が行くという意味で、青年海外協力隊の果たした役割はすごいものがあります。青年海外協力隊は世界130カ国ほどの派遣実績があります。私の研究室の特徴は、青年海外協力隊経験者のブラッシュアップで、大学院で学んでまた社会に出ていきます。来年度は、私の研究室に5人の経験者が在籍します。中米、アフリカ、南太平洋、東南アジアで協力隊活動をやった人です。青年海外協力隊によって国際交流が多様化したことは、高く評価していいと思います。

高際 国際貢献活動経験者特別選抜は、国際貢献活動経験者が修士課程でさらに勉強して、「これまでの経験を学術的に客観化して、質を向上してまた世界に」というユニークなプログラムとっております。それではインターンシップに関して、これも友松先生におまかせします。

友松 今年は学部発足15年目になりますが、学生にとり実務経験は重要ということで、学部発足3年目に、私の提案でインターンシップ制度を設けました。学生がインターンシップ先を自分で探し、向こうと交渉し、向こうの内諾を得たら、学部長名で依頼状を出して、インターンシップをやる制度です。インターンシップの前に事前指導を行います。ビジネスマナーやインターンシップをやる意義を学生に指導して、インターンシップ先に送り、終了後に報告書を提出するかたちで単位を認定します。特定のインターンシップ先はなく、学生の希望により、特定の企業、自治体、市民団体、NGO・NPOを選びます。報告書はホームページに載せています。学生は、国内だけでなく、国外のインターンシップ先も見つけてきます。来年度からは、国内インターンシップを「国際キャリア実習Ⅰ」という科目、国外インターンシップを「国際キャリア実習Ⅱ」という新規科目とします。国内と国外のインターンシップを積極的にやっていきます。

板橋 それは単位に認められるのですか。

友松 それぞれ2単位です。

岡田 そのための特任教員も採用しました。

友松 文科省から助成金をいただきました。助成期間は2年半と短いですが、特任教員を雇い、インターンシップを行う「国際キャリア実習Ⅰ及びⅡ」、「国際実務英語Ⅰ及びⅡ」「国際キャリア開発基礎」「国際キャリア開発特論」、合計6科目を新設し、国際分野のキャリア教育を活発化させていく事業で、今年度9月にスタートしました。6科目がすべて開講されるのは、平成23年度からです。国内と国外のインターンを行ない、仕事先で使う実務的な英語教育も施して、国際分野のキャリア教育を飛躍的に強化したいと思っています。

板橋 企業サイドでも、国内だけではなく、海外との通商、向こうに工場を建てることから始まっていきます。そうしないと、国内需要だけではまかなえない状況に今、立ち至っています。ですから、そういう人材へのニーズは、日本の企業の中にも非常に高いと思います。

インターンシップで勉強をされて、認められれば、私は国際学部の卒業生が、本当に海外で羽ばたく大事な部分になると想像します。

高際：以前から友松先生はインターンシップの重要性を説いておられて、早くから熱心にやられて来られましたが、それが認められて、文科省の補助金が付いたという状況です。

佐久間 板橋さん、企業のそういう考え方、われわれNPOとしては、非常にありがたいです。NPOは多種多様で、それぞれかなり専門的なグループも多いものですから、いざ何かやる場合に、キャリア経験が重要になります。実際学生さんが、在学中に企業でいろいろ学ぶことが、ひいてはわれわれNPOにも関係してきます。NPOは資金がないため、企業の協力はすごく大きいです。援助金をいただいてやっておりますが、企業と一緒に歩んでいくことで解決していく筋道ができればいいと考えております。

高際 それでは、「キャリア教育・就職支援センターはうまく働いているか」「国際学部教員それぞれは個別にどのような就職支援を行っているのか」、それから「留学生の就職先について」です。

3、4年前にキャリア教育・就職支援センターができ、活発に活動しています。キャリアデザインノートを作って、学生たちに就職の心構え、就活の進め方を教えています。それから様々なイベントを行っており、以前にはキャリアフェスティバルを開きました。たくさんの企業をお呼びして、ブースを開いていただき、合同企業・公務員説明会をやりました。ただ、学生の反応が良くなく、せっかく大企業に来ていただいても、ブースには4、5人しか集まらず、おしかりを受けたこともありました。学生の意識と教員側の意識には、大きなギャップがあるようです。本学は東京から離れているせいか、就職活動の開始が3カ月ほど遅いと思います。都内であれば3年の前期後半辺りから動き出しますが、本学の学生が動き出すのは3年の12月くらいです。教員からの声掛けもしています。キャリア教育・就職支援センターのおかげで、私のゼミの学生は、9人全員進路が決まりました。ですから、キャリア教育・就職支援センターと連携して、キャリア教育で学生の意識を高めようとしています。国際学部では独自に、年2回7月と11月に本学部卒業生を呼び、その業務や就職活動の経験談を聞く会を開いております。3年生を中心に、30名程度の参加者が集まります。

岡田 卒業生による就職セミナーといえるかと思えます

高際 国際学部の就職セミナーを年2回開いて、本学のキャリア教育・就職支援センターが毎月様々な催しを行っている状況です。

板橋 私の会社には200名近い社員がおります。かつては会社が1つのモデルというか型を作って、それをやっていたらいいという感じが、20年ほど前まではありました。しかし、入ってきた人たちの考えや個性的な動きをもっと会社の中心にくみ上げなければ駄目な時代になりました。そういう意味では、キャリア教育を受けておられる方は発言が違うんですね。

ですから、国際学部に限らず、社会に出た時に個性が発揮できる学生を大学で育てていただくのは、企業にとっては大変プラスになります。

特に今、企業自体が国際化されており、国内だけの考え方では展開できません。国際学部においても、そういう先陣を切っていただくことは大変ありがたいと思います。

岡田 少々話がずれますが、ここに来ている留学生は教育力を持っています。それを、何とか活用できないかと学部として考えています。短期や研究生も含めて、常に留学生は130人いるわけです。留学生との交流によって、日本人学生の国際力を伸ばせないかと考えています。

板橋 日本人のレベルを上げられないかということですか。

岡田 そうです各国から来ていますからね。そして、留学生も日本力が付くわけです。それで、交流する空間を4月に大学に要求し、おそらく近いうちには交流ルームができると思います。学生同士の高め合う力をまだ引き出していないのです。やっと交流空間ができる。国際学部が言い出したことですが、大学全体の空間として作ってくれることになっています。

板橋 日本人学生には、自分の国を離れて日本で勉強したいという意志に触れてほしいですね。

岡田 それに触れるだけでもいいと考えています。

板橋 ですから、日本人学生がそういう交流ルームでそういうことを感じるのが非常に大事です。いいアイデアです。

高際 「国際学部教員それぞれ個別にどのような就職支援を行っているのか」ですが、学生は3年後期から各研究室に入ります。そこでは、各教員が卒業論文を指導しますが、同時に就職活動も支援します。重田先生はどのように就職支援をなさっていますか。

重田 自分のゼミ生での経験で申し上げますと、ゼミ生のニーズは非常に多様です。それぞれ個人で探しますが、やって駄目な場合、キャリア教育・就職支援センターに行って紹介してもらおうと、進路が開ける学生がいます。留学生に関しては、今まで留学生を持ったことがないので一般論ですが、例えば中国の留学生は、日本企業に就職したい学生もおり、私個人のツテで紹介したりしています。

板橋 ロータリー米山奨学生も、卒業後中国の方は約半分くらいが日本の企業に勤めますね。

重田 日本の企業は今、優秀な中国人を欲しがっていますからね。

板橋 中国駐在員のようなかたちで、籍は日本の会社に置いて、中国で活躍している中国人がいますよ。

重田 大学院に行きたいという研究生を、毎年1人くらい引き受けます。その人が大学院でうまく育ってくれば、日本での就職先も将来的には考えていきたいと思います。

佐々木（一） 私の場合は、基本的に就職の相談に乗ります。特に困っている学生ですね。できる限り話を聞いて、何かサジェスションとかお話しします。英語や言語学をやっている

すので、具体的な企業紹介は難しいです。キャリア教育・就職支援センターで個人的に相談にも乗ってもらい、話が済んだところで、また私が話を聞くかたちでやっています。それから、時折、キャリア教育・就職支援センターないしは学務委員の先生から、求人情報が入ります。高校の非常勤講師の話がある場合には、該当する学生やまだ就職が決まっていない学生に紹介します。

友松 基本スタンスは佐々木先生と同じで、相談があれば応じるかたちです。しかし今、教員は非常に多忙で、学生1人ひとりのところまで行って指導するのは難しいです。エントリーシートは、会社を受けるときに会社側の要求した書式に従って自分を表現するものです。エントリーシートの書き方の指導は、求められればやります。学生は自分をどうやって売り込んでいいかわからない。自分をどういう角度でどう説明したらいいかわからない。自分がすごくいいことをやっているのに、その価値に気が付かない。第三者的な目から、このことに気を付けてあげる指導をします。教員も含めた社会人と話して、自分に気付くのは就職活動では非常に重要です。

岡田 就職というより就職前の基本姿勢ですね。

板橋 企業が求める考え方も、時代とともに変わりますからね。今の時代のポイントとなる点をご指導いただけると、個別の会社名を挙げていくよりは、学生も違うと思います。

重田 時代が非常に厳しく、どの先生も学生も非常に苦労しています。教員も学生に任せるのではなくて、こういう時代だからこそどうしていくべきなのか、それなりの指導が必要と思います。

佐久間 先日からフィリピン人も交えて、健康セミナー、勉強会を行っていますが、彼は中学から日本にいて、日本語は日本人とほとんど変わりません。その彼が日本人の性質を分析してくれます。彼は日本の保険会社に勤めていて、日本でももっと主張することがすごく大事じゃないかと言います。それで私は、自分のいい所や自慢話を言いながらやっていますが、そういう人が少ないと言います。何か1歩下がるのは日本人の美德でもありますが、そこがもったいないと言います。彼は日本に来ていて、日本人のいい所も分かるし、フィリピン人のいい所も分かるが、日本人はフィリピン人のいい所を知らないと言います。商売をするにも、フィリピンには様々ないい所があるので、それを自分は教えたいと言っていました。

高際 留学生の就職先については、どうでしょうか。

佐々木（一） このパンフレットの27ページに具体的な例があります。27ページの左下にベトナムの方が、顔写真入りで出ています。この方は学部で4年間一生懸命勉強して、卒論を書いて、すぐに日本ロジテムという株式会社に就職しました。日本で就職して、ベトナムとの交易、物流分野で、活躍しています。そしてこの方は、卒業生による就職セミナーに来て、国際学部の学生に体験談をしてくれました。日本で就職した典型的な例です。

高際 留学生には、大学院進学や就職する学生、帰国する学生もいますが、何らかのかたちで進路を見つけている状況ですね。

佐々木（一） 大学院留学生の場合、本国に帰って大学の先生になった人もいました。博士後期課程もありますので、今後、ますます増えると思います。

高際 キャリア教育についてはこのぐらいでよろしいでしょうか？ それでは5番目。「国際的な奉仕をビジネスとしている会社が最近始まっているが、学生はそれとの接触を持っているか、あるいは専門教育や就職支援等で触れているか」ですが、重田先生から説明していただきます。

重田 友松先生からも補足していただきたいのですが、社会起業家とかソーシャルビジネスのことを言っておられるとおもいます。私のゼミ学生で言うと、NGO・NPOへの就職が収入の面から将来的に非常に厳しいので、この分野に非常に興味を持っている学生がいます。今後は社会起業家やソーシャルビジネスが、時代の流行と学生も思っていて、そういう所にアプローチしたり、インターンをする学生もいます。それは学生の判断に任せている状況です。友松先生の学生は、フェアトレードをやっている会社に就職した学生もいますが、私の所ではまだ就職実績はないです。けれども、学生も非常に興味を持っている段階ですね。もう少し社会起業家やソーシャルビジネスが社会に根付いて、実態として日本の社会で動いていけば、将来の就職先として可能性があると思います。こういった分野がお金のほうに走り出してしまいう危険性もあります。例えば、アメリカのソーシャルビジネス企業が投資に動いた結果、例の金融危機でひどい目に遭ったと聞いています。NGO・NPOがお金に走ると、ビジネスと同じになり、お金が集まらない、ビジネスをやって失敗する、その二重苦になってしまいます。社会起業家やソーシャルビジネスが、これからどうやっていくのかも、学生にアドバイスをしなくてはと思っています。

板橋 現在そういう失敗例があります。その辺のところは、やはりよく見極めないといけませんね。

重田 社会起業家やソーシャルビジネスは、まだ始まったばかりですので見極めが必要ですね。

佐久間 学生さんが期待して来るけれど、立ち行かなくなる場合が多いです。

重田 そういった意味では、先端企業やベンチャー企業と同じですよ。

佐久間 ソーシャルビジネスはもうけのための事業ではないことを企業側が理解していれば、かなり違うと思います。

重田 これからだと思いますが、まだ実績がないですからね。

板橋 これは中国人留学生の例ですが、ロータリー米山の学友会を卒業して帰国し、日系企業が多い青島で、日本語の語学学校を起こしたんですよ。非常に今、成功していますが、日

系企業に勤める中国人に日本語を教えています。日本から行った管理者に中国語を教える学校をやって、成功している人がいます。宇都宮大学の卒業生だったと思います。

岡田 中国では、日本語に対する需要はまだまだ強いのではないのでしょうか。中国にとっては日本語が必要という感じですね。

佐久間 地域によって日本語に対する需要が違います。大連はものすごく需要があります。中国では日本への研修制度があります。その大元をやっている方が、私は大連に1週間ほど滞在しましたが、様々な書類を持ってきて、日本語として正しいか聞かれました。逆に言うと、日本語を教える人がまだ少ないのです。

友松 私の実習科目では、ソーシャルビジネスの見学を東京でしています。文科省助成の国際キャリア教育プログラムの中で、企業のCSR活動やソーシャルビジネスの分野の教育を強化していきたいと考えています。ソーシャルビジネスは将来性を見込める分野であり、社会的な問題解決のためのビジネスを学生に将来起業してもらいたい願いを持っております。

板橋 私もまったくそう思います。ですから、それがスモールビジネスであっても、意味があれば、大きくもなると考えています。

友松 ソーシャルビジネスも一種のベンチャー企業です。実は、国際学部の学生は、ベンチャー企業に行く学生が結構多いです。どの企業がベンチャーでどれが違うのか、会社名から見分けにくいですが、大手企業とか歴史のある企業を選ぶ、そういう価値観や観点を持つ学生は、私の印象では少数派のような気がします。それよりも、小さくても自分なりに仕事を企画して実施していける企業を選ぶ傾向があります。

板橋 要するに起業精神というものですか。

岡田 そうですね。だから、一生勤めるつもりではなくて、自分が何かを始めるために会社に入るのです。

板橋 それは非常に先端的な考え方だと思います。

友松 国際学部がベンチャー学部だからだと思います。

板橋 それはもう、国際学部の基本的な特色にさせていただきたいですね。

友松 僕らはまだ若い学部ですから、ベンチャー学部といってもよいでしょう。

安定とか、歴史があるとか、大企業だとか、ブランド的だということに、学生はさほどなびかない。そういう意味では、時代の先端を捕まえているのかもしれない。

社員が10名から20名程度の小さな広告会社に勤めて、そこから転職していく。国際学部の学生ほど、そういうベンチャー的なところへかなり行く。という意味では、最先端を行っているのかもしれない。密かにそう思っています。

板橋 それは時代の先読みですね。少し話が変わりますが、今、ロータリー米山財団で私が発案しまして、ホーム・カミング・デイをつくっています。現地に帰ったロータリー米山の

卒業生が、今やっていることを報告する会です。およそ1週間かけて、ロータリー米山の地区大会があるので、その時に合わせてお呼びしています。往復の旅費と滞在費で、1名およそ25万円の予算を本部で組み、各地区で学生を呼び戻します。「今、私はこういうことをやっています」という話を30分程度してほしいと発案したら、大変好評なのです。今までロータリー米山への寄付は、義務感でやっていただけという方もいました。しかし、「こういう人を育てているのか」が分かるようになると、寄付にもいい影響が出てきます。ここ2年行いましたが、非常に成功しております。

高際 それでは、6番に進みます。「学生の異文化コミュニケーションの能力は十分か。国際的に通用する人間をつくるのが重要だ。ロータリー米山記念奨学会で日本に残って就職した学友が、ロータリークラブを作り、社会奉仕を考えている。中国に米山学友会ができて、日本との友好関係を促進する強力なグループが誕生している。そのような関係は、今後の日本経済の上で大きな力となる。日本のサークルとできるだけ接触の機会を奨励し、国際的に通用する学生を育成する。その意味で日本の文化を十分に理解させ、職業の選択にも配慮してあげる必要がある」というご意見をいただいております。異文化コミュニケーション能力に関しては佐々木先生お願いします。

佐々木（一） これは語学能力というよりは、むしろ異なる文化を理解する能力のことでしょうか。それを踏まえて、どう行動するかということですよ。これは、基本的に十分といってよいかと思います。しっかりやっている留学生は、あふれんばかりに思っていると思います。そして、日本人学生も、そういう意識が一般的に高いと言えると思います。

重田 留学で提携校に行き帰ってくる学生は、留学先の文化や相手の国の方とコミュニケーションできると思います。交換留学の留学生に対して、本学の学生が、留学生を個別に助けるチューター制度があります。毎年2回ほど集まって、留学生と学生との顔合わせ会を開いています。そうすると、留学生のお世話を通してコミュニケーションが生まれるようになります。

岡田 大学の空間として、交流ルームなどを作っていきたいと思います。こちらが何かを与えるというよりは、彼ら同士にあるそういう能力を高めていきたいと思っています。

板橋 交流ルームがベースになると、今申し上げようと思っていたところです。

岡田 海外協力隊経験者が増えたというのは、友松先生の所がそういう道場になっているということです。切磋琢磨する空間になって、刺激し合っているのでしょう。留学生にはそのような空間が今ない状態です。

佐々木（一） 私の所の卒論生で、この4月から愛知県の英語の高校の先生になる男性がいます。彼は社会学科の学生ですが、文化学科に来て、英語や言語学関係を一生懸命勉強して、論文を書きました。国際学部ではそういうかたちで英語を修めて、先生になる人が少数ながらいます。従来の英語の先生とは違った、異文化を十分理解する先生になると思います。彼

は、初習外国語でタイ語を学んだ関係で、日本の絵本をタイ語に翻訳してタイ王国に送る活動をするサークルに属していました。タイ王国に実際に行った経験から、英語の先生ですが、非英語圏に縁があり、異文化に接触したという強い意識を持っている。このような人が英語の先生になると、国際学部ならではの英語の先生が生まれてくる。本学部の学生は、異文化を理解し、意欲もあって、行動力もある現れと思います。

板橋 それは大変評価できることですね。

高際 異文化間コミュニケーションという授業もあります。1年生前期に文化を超えてコミュニケーションを取ることを原理的に教わります。いろいろな留学生がいる、学生が外に出ていく、90%ぐらいの学生が何らかのかたちで外国へ行きます。そういうところで身に付けるものは、かなり高いものがあると感じています。

板橋 国際学部ができて15年ですか。その道で何十年も経つ伝統ある大学は、大学の中に絶対を守るべき道のようなものができているわけです。けれども、それが逆に邪魔をします。15年という歴史の中で、宇都宮大学さんは新しいニーズをうまくとらえておられて、私は素晴らしい効果が、今後発揮できるんじゃないかと思います。

岡田 国際学部1期生で、韓国からの留学生が今、山梨の大学の先生になっています。国際学研究科で、戦前に山梨県から韓国に行って活躍した浅川巧という陶芸・工芸評論家を研究しました。そして、彼女は浅川の業績を顕彰して、山梨県で村おこし、町おこしを行ったのです。コミュニケーション能力を伸ばすという点で留学生が非常に役に立つわけですから、国際学部が持っている留学生の力を、何とかもっと使いたいのです。

板橋 やはり、ウィルつまり意思がありますね。

岡田 それに日本の学生もやはり触れないといけません。

佐久間 日本人は外国人にすごくやさしいので、それも効果があります。日本人がやるよりも、外国人がやったほうが受け入れられるわけです。

板橋 今日いろいろお話を伺って、国際学部には私は非常に大きな期待を感じました。80年、90年やってきた歴史ある大学は、もう絶対にそこから逸れてはいけない、はみ出してはいけないという伝統ができてしまっています。それはそれなりに優れていますが、ここ20年で時代は大きく変わりました。むしろ縛りがないというのは時代の変化に対応できる力です。ぜひ頑張ってくださいと思いますね。

友松 そういう積極的な評価を頂けるとは思わなかったので、大変うれしく思います。

岡田 国際学部が認められたのはここ10年ぐらいたってからです。今年15年目ぐらいから、ほかの人から国際学部と肉声で発音してもらえました。これまでは国際学部という名称を、こちらから言わなければならなかった。ようやく向こうから、国際学部という言葉を言っていただくようになりました。

友松 今、社会の変化に対応するある種の柔軟性が国際学部にはある、というご発言でした。ある意味で、国際学部はいい加減な学部です。いい加減というのは、「国際学」を専門分野としていますが、学問的に必ずしも定義が明確ではないのです。宇都宮大学のほかの3学部は、みな日本の産業構造の中に特定の産業分野が想定できます。農学部しかり、工学部しかり、教育学部しかり。国際学部に対応する日本の産業分野は、例えば国際機関とかNGOはありますが、明確に想定できません。ある意味のいい加減さあるいは柔軟性があるとすれば、このような事情が背景にあります。

高際 これはまったくそのとおりだと思います。ですから、あらゆることに「国際」はかかわるわけです。学生は国際というものを狭く考えてしまいがちですが、実は普通の企業でも国際的な仕事をされており、そこに行けば絶対に働く所はあると言っているところです。

板橋 本当にそういう意味では、私も非常に心強く思いました。

高際 ありがとうございます。最後になりますが、「学生の英語力はいかがか。英文学ではなく、海外とのコミュニケーションに必要な英語教育、それからTOEIC、TOEFLへの受験は奨励しているのか」についてです。

佐々木（一） 「TOEIC、TOEFLへの受験は奨励しているのか」についてですが、TOEICは今の1年生から、受験が義務とされました。新しい英語教育体制になりました。入学時と入学1年後に、全員が受験します。それ以前も奨励はしましたが、義務付けはしませんでした。英文学ではなく、海外とのコミュニケーションに必要な英語教育は、十分に意識してやってきました。しかし、その結果の実力は見えないというのが現状かと思います。「本学の、あるいは本学の中での国際学部の英語教育がどうなっているのか」ですが、全学部生が受ける共通教育と国際学部専門外国語の中の英語教育の連携になると思います。共通教育では、海外とのコミュニケーション、非常に汎用性のあるコミュニケーション能力としての英語を修めるところに力点があります。それに対して、学部の英語教育は、学問を扱える英語力つまり専門性を高めることでこれまでやってきました。学問的な裏付けのある英語教育は、実際に海外に出たときに本当の力になると思います。しかしまだ、改善の余地がありますので、平成22年度から国際学部の英語教育をさらに充実します。合宿をするインテンシブ・トレーニング・キャンプの形態を取った英語会話に加え、上級英語会話を開講します。

高際 インテンシブ・トレーニングコースでは、16人程度のグループを5組で3泊4日合宿します。英語だけで生活し、英語の授業をし、英語でアクティビティをやります。アンドリュウ・ライマンというカナダ人教員と、バーバラ・モリソンというアメリカ人教員の2人の担当者がいます。2人は、単なる英語教育ではなく、インターナショナルな雰囲気をつくるため留学生を入れています。アメリカ、オーストラリア、プラス、チェコ、フランスの学生がいたり、インターナショナルな雰囲気が生まれます。

板橋 非英語国からの留学生もいますね。

高際 そうですね。彼らは英語がうまいです。そこで生活をする、英語は英国民や米国民だけのものじゃないことが分かります。ですから、この前は、英語のうまい中国人学生も入ってきました。インターナショナルな環境の中で英語をやろうという姿勢です。もう1つは、留学生と日本人との親密さができて非常に留学生も喜ぶためです。チューターとして付き合うと言っても、寝食を共にしたことはないわけですから、3泊4日の宿泊はすごく大きな経験になり、それ以後は留学生と日本人学生との距離が一気に縮まります。

板橋 私がこの質問でお聞きしたかったのは、そういう英語教育です。異文化のもとで外国人との間で共通言語に日本語を使うことは、とても望めません。ですから、多民族と話ができる、理解し合える英語力です。オーソドックスな英語でなくとも、私はいいと思います。要するにコミュニケーションの助けになる英語力ですね。

高際 ですから、ライマン先生とモリソン先生の考えは正しいと思います。インターナショナルな環境の中で英語をしゃべるのが大切だと力説しておられるのです。私たちも影響を受けました。それから、これは費用が掛かるので参加者は15人ですが、外国語臨地演習英語という科目では、オーストラリアのパスに3週間、学生を送ります。4単位の科目で、事前指導の後、向こうで3週間過ごします。カーティン工科大学に学生を送りますが、これがいいのは学生がホームステイして英語を勉強するところです。オーストラリア自体が多民族国家ですから、ホームステイがイタリア系であったり、インド系であったりします。そのことに驚くようです。向こうの英語センターでは本学の学生だけでまとまるのではなく、ほかの国の学生と一緒に勉強します。

非常にその点もいいですね。今多いのは中国系、タイ系、それからアラブ系です。

板橋 東京で経済人が集まった席で、アメリカ人の新聞記者の英語スピーチを聴いたことがあります。3カ国語をしゃべれる人はトリリンガル、2カ国語話せる人はバイリンガルですが、1カ国語しか話せない人はアメリカで何と何とのかと質問すると、モノリンガルではなくアメリカンと言うのだと答えてくれました。アメリカの英語というのは西と東では違いますし、かなりいい加減なところもありますが、世界中、英語だけでホテルに泊まれます。

高際 そうですね。ライマン先生はドイツ系カナダ人です。中学生のころにおばあさんがドイツにいて、そのときの旅行が非常に大きな経験になったということです。モリソン先生はフランス系アメリカ人です。向こうでも、純粋にアングロサクソンだけでないです。そういう意識のある先生がここにおられるので、インターナショナル・スタディーズに相応しい先生と思っています。

佐久間 友松先生からいただいた評価の観点について、質問があるのですが、私の意見を後でお渡ししてお見せします。おおよそ板橋氏と同じですが、言葉を多少補足しないと誤解を

招くと思います。先ほど国際学部の趣旨についてお話がありましたが、国際学部にすごくNPOと同じ感覚を受けました。NPOには、人権、健康、食糧、環境など、様々な分野があります。簡単に言えば、何でもありという感覚です。国際学部もNPOとよく似ています。

高際 「未来に強い興味と関心を育てる」それから「自分自身の問題解決できる能力。異文化を共有できる能力、培う内容」なんですね。私たちも問題解決能力が非常に重要と考えております。それから、未来に強い興味と関心は育てているのでしょうか。異文化を共有できる能力は異文化間コミュニケーションで育てていますが、未来に対する強い興味と関心を育てているのでしょうか。

佐久間 未来に対する強い興味と関心とは、未来をイメージすることです。イメージできて、その方向に行くということですね。

高際 このことは、われわれが考えていなかった観点です。例えば環境分野ではこれからを考えていると思いますが、未来の興味というのは今までわれわれ教員に欠けていた観点かと思えます。

友松 われわれに欠けていた観点ですね。未来志向という言葉は使っていないですね。

重田 私の中にグローバルガバナンスという考え方があって、問題解決に向かって国際的な枠組みの中でステークホルダーと一緒に考えて行きます。国際学部は、そういう枠組みで考えていると思います。ですから、未来志向という言葉は確かに使っていないけれども、グローバルガバナンスという観点から、問題解決能力なり、未来を見ていくことは、各教員はそういう教育をしていると思います。

中国、インドのような新興国は別として、日本には暗い話題が多いかと思えます。われわれ日本が描くビジョン、環境問題ばかり、少子化問題ばかり、様々あると思えます。どういう未来志向にしたらいいか、先生方からお聞きしたいです。

佐久間 われわれが育った時代には、野口英世のような理想的偉人にあこがれるなど将来の夢がありました。しかし、今の子は実際そういう機会がなかなかないと思います。簡単に言えば、偉人たちの業績を知らせるとか、伝記を読めば、自然とそれは育つと思います。強制的ではなく、自然にそうする環境づくりが非常に役に立ちます。中小企業の方が年間3万人自殺しています。私も会社をつぶしたことがあります。会社と自分の人生と一緒に考えてしまうのです。会社がなくなることは、自分がなくなると思えてしまいます。結局苦しいから、自分の命を絶ってしまうケースが非常に多いと思います。私も実はそういう状況に陥り、弁護士に相談したときに、「佐久間さん、仕事と人生、企業と人生は違うんだから、企業が別になくなったって、あなたの人生は終わりじゃない」と言われてほっとした記憶があります。その弁護士さんに「保険は全部解約しなさい」と言われました。自分が亡くなれば、いくらお金が企業に入る仕組みだからです。そこで全部解約して、非常にほっとしました。そし

てこれから自分は何をやるか考えました。小さいころ、こうなりたいと思っていた夢があって、そこに向かって知識や経験を積んで、1つずつ階段を上っていけばいいという漠然としたイメージを持ったわけです。

高際 それから、成人病のことを勉強されたのですか。

佐久間 そうです。だから勉強を始めたのはすごく遅いです。しかし、タイミング的には、いわゆる成人病と言われたものが、どんどん目立ってきた時期だったので、これは非常に重要と考えました。医療費が今35兆円程度にまで増大しましたね。国の収入の8割方は医療費です。医療費が高くなる原因は、長生きしていて、いわゆる成人病がたくさん出てきて、お金が掛かっているわけです。ですから、65才以上の人たちの健康を管理して、健康なまま亡くなればお金は一銭も掛からない。家族も負担がなくなります。今は介護のために、子どもの人生を駄目にしてている人はたくさんいます。タバコを止めなさいと言うべきではないでしょうか。「俺は別に命が惜しくないから」とおっしゃるのですが、他人の命にも影響して、家族の迷惑にもなります。人間の寿命と健康寿命というのがあるためです。亡くなるまで平均すると、男性で6年間、女性は8年間寝たきりです。そこでお金が掛かり、社会問題も起きているわけです。どんどん先に行って、いいことがあるというイメージを持つことは非常にいいことだと思います。

高際 例えば環境にしても、こうやれば良くなるというイメージが出てくれば、学生たちもやる気になると思います。破滅的なイメージは持ってほしくないですね。

佐久間 一番大事なのは、自分が何歳まで生きるのかほとんど意識していないことです。私は一応、100歳以上を目標にしています。それをするには、自分の体をどうしたらいいか見えてきます。食べ物もそうです。日本の食品は添加物だらけです。子どもが訳の分からない病気にかかるわけです。抗生物質が効かない強い菌もどんどん出てくるわけです。自然界には毒がありますが、必ずそれを直すものもあります。両方を見つけておけば問題ないわけです。自然界になかった石油製品での食品添加物は、成人病の原因である活性酸素を発生させます。学問的には活性酸素を消せばいいわけです。そして、最大の活性酸素の発生源は、タバコとストレスといわれています。人間の体は80才まで生きる力を持っています。80前後で亡くなると、寿命、いわゆる自然死です。昔はだいたい寿命で亡くなって、病気などはほとんどしない。それが長生きし過ぎているものだから、様々な病気の原因が出てくるわけです。けれど、それは習慣で防げます。

板橋 やはり適度な運動も必要ですか。

佐久間 スロージョギングというのがいいそうです。歩く速度でジョギングすると、前頭前野が発達してノイローゼも解消します。

普通のウォーキングだと、1時間やらないと効果がないです。最初の20分は血液中の糖分が燃

え、もう20分やると筋肉のグリコーゲンが燃えます。さらにあと20分やると中性脂肪が燃えるので、ここまで行かないといけません。スロージョギングは30分あれば同じ効果が得られます。時間を短縮して効果は倍になります。

品川 ゆっくりでもジョギングのほうがエネルギーの燃焼になるということですね。

佐久間 そうです。速い筋肉、速筋と、遅い筋肉、遅筋と言いますよね。遅筋を活性化させるのがいいです。マグロが一生泳いでいても疲れないように、遅筋を使います。スロージョギングは1週間に2回で構いません。一番汗をかくのは自転車です。自転車は歩くよりも早く漕いでください。

友松 少なくとも汗をかくまでやらないと、筋肉中のグリコーゲンが分解されない。本当は中性脂質を燃やすにはそのさらに先まで運動をしないといけないので、汗が出て当たり前だということですね。

佐久間 そうすると、内蔵に付いている脂肪が取れ、動きが良くなります。

テニスは、ジョギングと違って筋力が付くのでいいことです。速く歩くことも筋力が付くので、基礎代謝が上がります。

友松 板橋さんは経団連の仕事からロータリーの理事長まで非常に多忙でいらっしゃると思いますが、ストレス管理はどうかおられますか。

板橋 私は毎日日記を付けています。例えば夜1時になっても1時半になっても、必ず日記を付けて、一日にあったことを20、30分かけて必ずパソコンに入れておきます。もう4、5年続けています。

高際 本日は、ありがとうございました。

5. 外部評価を受けて

4人の外部評価委員からは、これからの宇都宮大学国際学部の発展にとって重要な指摘を頂き、今後将来計画委員会等で細かな検討を行わなければならないと感じているが、ここでは大きくまとめさせていただきたい。

1 履修モデルの細分化による学生のチームワーク低下の懸念

奥田宏司教授は、少ない学生をさらに小さな研究室に配属することは、学生の学習や研究におけるチームワークが低下する懸念を表明しておられる。「ゼミなど各クラス的人数が少なく、学生同士のチームワークが作りにくいのではないだろうか。ゼミにおいて教員と個々の学生との「交流」が中心となり、学生相互の「交流」は進んでいるであろうか。学生は、教員による指導ばかりでなく学生相互の切磋琢磨によって育つ側面があるからである。」との指摘は重要である。確かにこの点について、国際学部が意識的に工夫したことはないように思われる。課外活動だけでなく、学習においても学生の切磋琢磨を考えることの必要性をご指摘いただけたことは有り難い。

2 国際学の学問方法の確立

奥田宏司教授も徐承元副教授も国際学の学問的位置づけに対して、類似の学問の従事される研究者として懸念を表明しておられる。宇都宮大学国際学部としては、学際性にその特質を求めているが、インターネットによる情報の入手が容易になった現在、基本的文献に触れずに問題を扱う学生が増えていることに警戒せねばならない。これに対応するには、授業を整えると同時に、教員全員が共通に理解しておくべき基本文献一覧を作成して、教員自身の理解の深化を図りながら、教育に従事する必要があるであろう。

3 留学のための外国語教育の強化

多くの留学生を派遣している立命館大学の経験から、外国語教育の必要性を強調された。国際学部の経験からも出発前に外国語教育を強化しておくこと、留学の成果が倍加される。この仕事は学生部が今鋭意行っている状態であるが、ぜひとも学生部との連携を強化すべきであろう。

4 英語による授業の増加

今後の留学生の増加を見据えて、英語による授業を増やすことも真剣に考えられね

ばならない。これは、欧米からの交換留学生だけでなく、フィリピンやマレーシアなどの非漢字圏のアジアからの留学生の増加に対応するためにも有効であろう。

5 獲得すべき能力の客観化

高麗大学日語日文学科では、卒業要件として日本語能力1級と6か月の日本への留学が求められているという。このために日本の30の大学と交流協定を結んで、学生の留学の環境を整えている。このような明確な卒業条件は現在の日本の国立大学法人では難しいであろうが、社会への説明を少しでも容易にする努力は、これからも続けられねばならない。国際学部の学生、あるいは国際社会学科、国際文化学科に共通の獲得能力は、まだ十分に客観化されていない。これが簡単にいくとも思われぬし、性急に客観化することは、学問の貧困化を招く危険があることには注意しなければならないが、卒業生が社会から信頼されるような高い能力をもつ学生であるという評価が確立するように努力を重ねて行く必要がある。

6 留学生の位置づけの確立

板橋敏雄氏はロータリー米山財団のご経験から、留学生に支援を送り、卒業後も連絡を取り続けることの必要性を指摘していただいた。あたかも国際学部でもその必要性に気づき、その仕組みづくりを始めようとしていたところであるが、まだ留学生の一人一人に目を届かせ、卒業後も今より連絡の取りやすい状態を作ることが国際学部には求められている。現在考えられている仕組みをできるだけ早い段階で実施することが必要であろう。

7 学生に希望ある未来を提示することの必要性

佐久間辰雄氏は、学生に希望を与えることの必要性を強調された。国際問題には、民族紛争、地球環境問題、貧富の格差など暗い問題が多い。しかしよりよい世界を造るためには、希望が必要である。佐久間氏の提言を真摯に受け止め、否定的ではない、積極的なミッションの提示を行うべきであろう。

後 記

今回ほど楽しくまた手応えを感じながら仕事をしたことはありません。それは3回行われた聞き取り調査が内容豊かであったからです。高い見識を備えた外部評価委員が、宇都宮大学国際学部の発展を願って、暖かく、しかし時に厳しく、評価してくださいました。また、同席した国際学部の学部長、学科長、点検評価委員たちも、質問に真剣に答えた結果、はからずも日頃よりもお互いに深い認識に達しました。時に、自分の理解の浅さを同僚から正されることもあり、このような機会の貴重さを認識した次第でした。この場を借りて、お忙しい年度末に外部評価委員を引き受けくださった、奥田宏司立命館大学教授、徐承元高麗大学副教授、板橋敏雄栃木県経済同友会筆頭代表幹事、佐久間辰雄栃木県健康管理士会会長に心より御礼申し上げます。また外部評価委員の選任については、板木雅彦立命館大学国際関係学部長、中戸祐夫立命館国際関係学部教授、栃木県経済同友会、宇都宮市民活動センターにお世話になりました。有り難うございました。

宇都宮大学国際学部も設立からすでに15年が経ちました。日本の財政状況は逼迫しており、これからますます大学をめぐる状況は厳しさを増してくると思われませんが、もっと切実な問題を抱えて奮闘している世界の人々のことを考えれば、これも学部・研究科の発展の機会なのだと考えるべきでしょう。外部評価委員からいただいた評価をこれから真剣に検討して、学部・研究科を新しいレベルに引き上げられるように努力したいと思います。

平成22年7月

平成21年度国際学部・研究科点検評価委員会

委員長 高際澄雄

副委員長 友松篤信

委員 俣 永茂

委員 松井貴子

委員 品川 昇